令和3年度

幼児教育のあゆみ

その47

高知県国公立幼稚園・こども園会

令和3年度
幼児教育のあゆみ
その47
高知県国公立幼稚園・こども園会

令和３年度

幼児教育のあゆみ

その47

高知県国公立幼稚園・こども園会

は　じ　め　に

令和３年度の高知県国公立幼稚園・こども園会、園長等部会、主任等部会の事業報告及び４支部の研究成果のまとめとして、研究集録「幼児教育のあゆみ　その47」を発刊することとなりました。

去年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症まん延等の状況下でも教育活動を継続していくためにオンラインを活用した新たな取り組みに挑戦し、19園でともに学びを止めることなく取り組んできたことで、多くの教職員で学び合うことができました。会員の皆様のこの一年のご支援とご協力に心より感謝いたしますとともに、皆様の熱心な取り組みがそれぞれの園の子どもたちの成長へとつながり、次年度の研究や実践に生かされることを願っています。

さて、令和３年１月には、中央教育審議会から「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）が出され、また５月には文部科学省から「幼児教育スタートプラン」が公表されました。幼児期の教育の質の維持や向上を支えるものとなるよう、今後も質の高い幼児教育と子育ての支援を目指していきましょう。そのためにも、国公立幼稚園・こども園会の役割を自覚し、各園における教育実践の在り方を問い続けながら、幼児教育・保育の未来につなげていけるような幼児教育の研究や実践を積み重ねていきたいと思います。

終わりに、研究推進にあたり、ご支援・ご協力賜りました高知県教育委員会事務局幼保支援課、高知県教育センター、各市町村教育委員会をはじめ各関係機関、並びにご指導いただきました諸先生方に厚くお礼を申し上げます。

令和４年３月

高知県国公立幼稚園・こども園会　会長　　古　味　美　和

祝　　辞

高知県国公立幼稚園・こども園会の皆様のご努力と優れた研究の積み重ねにより、このたび「幼児教育のあゆみ47号」が発刊されることを心からお喜び申し上げます。

皆様方が熱心に取り組んでこられた研究の成果は、本県の幼児教育の充実とともに、保育者の資質向上につながるものであり、日々、研鑽を積まれておられますことに敬意を表します。

平成30年４月より施行となった幼稚園教育要領等では、幼児期の教育から小・中・高等学校までを見通して育成を目指す資質・能力が示され、多様な体験に関連して、幼児の発達に即した主体的・対話的で深い学びが実現できるよう、指導計画の作成と、幼児理解に基づいた評価がさらに重視されるなど、全ての保育者の資質・指導力の向上とともに、幼稚園教育要領等に基づく幼児教育の充実がますます求められています。

高知県教育委員会では、令和２年３月に策定された「第２期教育等の振興に関する施策の大綱」と、それに基づく具体的な事業を定めた「第３期高知県教育振興基本計画」において、６つの基本方針の一つに「就学前教育の充実」を位置付け、どこにいても質の高い教育及び保育を受けることができる環境作りや、小学校教育との円滑な接続の取組を一層、充実することとしています。

その取組の一環として、幼稚園、認定こども園等の保育者の皆様がよりよい実践を進めていただけるよう、保育者の資質・指導力や保護者支援の在り方などを示した「高知県教育・保育の質向上ガイドライン」を見直し、充実いたしました。

質の高い幼児期の教育は、幼稚園教育要領等に基づいた教育・保育を実施し、組織マネジメントを効果的に推進する仕組みを構築することなど、生涯の人格形成の基礎を培う重要な時期を担う教員の皆様方の自らの力量を高めようとする意識・意欲と、研究の積み重ねから生まれてきます。高知県国公立幼稚園・こども園会の研究については、新型コロナウイルス感染症予防対策のため、オンラインによる研究大会の開催等、新しい生活様式に沿った方法を見い出しながら、各園や支部での研究を深められています。その研究は、幼児一人一人の発達を踏まえながら計画的・意図的な保育を行い、子ども理解に基づき自らの実践を振り返る質の高い内容となっており、本県の幼児教育の向上に大きく寄与するものと考えております。

高知県国公立幼稚園・こども園会におかれましては、子ども一人一人の健やかな育ちを保障するため、今後も、幼児教育の先進的な研究、実践を積み重ねられ、本県の幼児教育を先導する役割を担っていただけることを期待しております。

結びに、高知県国公立幼稚園・こども園会の今後ますますのご発展と会員の皆様方のご活躍を心から祈念いたしまして、お祝いのことばといたします。

令和４年２月

高知県教育委員会事務局　幼保支援課長　　田　中　　健

目　　次

○はじめに　　高知県国公立幼稚園・こども園会会長　古味　美和

○祝　　辞　　高知県教育委員会事務局　幼保支援課長　田中　　健

Ⅰ．令和３年度高知県国公立幼稚園・こども園会　事業報告 …… 1

Ⅱ．令和３年度高知県国公立幼稚園・こども園会　園長等部会事業報告 …… 5

Ⅲ．令和３年度高知県国公立幼稚園・こども園会　主任等部会事業報告 …… 6

Ⅳ．令和３年度高知県国公立幼稚園・こども園会　研究部 …… 7

講演　「幼児期にふさわしい園生活を目指して～絵本や手遊びの役割～」
講師　　十文字学園女子大学　教授　　桶田 ゆかり

○東部支部 …… 14
○中部支部 …… 21
○高知支部 …… 29
○高岡支部 …… 36

編集後記 …… 49

Ⅰ　令和３年度高知県国公立幼稚園・こども園会　事業報告

活動方針

全国国公立幼稚園・こども園長会は、令和元年に七十周年の節目を迎えた。本会は、いつの時代も全ての子どもたちに質の高い教育を提供するため、各園において「環境を通して行う教育」「遊びを通しての総合的な指導」という幼児教育の基礎・基本に沿った実践に努めてきた。また、幼稚園教育要領等の理念を具現化した実践を発信することで、日本の幼児教育全体の質の維持・向上に尽力してきた。

本会の活動は、子どもたちが未来社会を切り拓くために必要な資質・能力を社会と共有・連携し、「社会に開かれた教育課程」の実現を図る。次代を担う人間性豊かな国民の育成を目指すとともに、自国を愛し他国を尊重する平和と発展に寄与する社会の形成者としての素地を培う幼児教育の実現を目指している。今後も、全国各地の国公立幼稚園・こども園は地域の幼児教育の核として、幼児教育の一層の発展に向けて力を発揮していく。

令和２年度は、新型コロナウイルス感染症が全世界に猛威をふるい、幼稚園・こども園も経験のない難局に立たされた。臨時休園や感染症対策など、かつてない対応が求められる状況の中でも質の高い教育を実践し続けることは、今後も追及すべき新たな課題である。

また、緊急事態宣言下、外出自粛の中、家庭という限られた人間関係の中で子育てをしたことは、保護者が我が子と向き合う時間の大切さや幼稚園・こども園の存在の意味を改めて見つめ直す機会となった。しかし、子育ての困難さを抱えた家族の増加や、虐待や育児放棄などの社会問題が見られるのも事実である。幼児は、家族をはじめとする身近な大人の愛情に包まれ、心の安定を得ることによって自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもって主体的に生活できるようになる。保護者が、子育ての第一義的責任を有していることを自覚し、子どもに愛情を注ぎ、子育ての喜びを地域社会のつながりの中で感じることができるようにすることの重要性もさらに高まっている。

本会は、このような今日的課題を明確に受け止め、予測できない変化に主体的に対応し、他者と協働して課題を解決し、様々な情報や知識を新たな価値につなげて、自らの目的にしていくことができる未来の担い手を育てていく使命がある。

Society 5.0 時代を迎えようとしている社会は、コロナ禍によって変革のスピードを上げている。多くの企業がリモートワークなど急速に新しい生活様式に舵を切る中、保護者の就労等で、子どもを長時間預けるための「量のニーズ」だけではなく、今後社会が必要とする人材育成につながる質の高い教育を受けさせたい「質のニーズ」に対する気運が高まりつつある。このことは、国公立幼稚園・こども園が、各地域で今以上に「求められる存在」になる大きなチャンスである。地域の子どもたちに広く門戸を開き、質の高い幼児教育の推進・充実を目指して実践を積み重ね、地域の幼児教育をリードする存在であるように努めていく。

幼児教育施設が多様化する中で幼児教育の質の維持・向上を図るには、本会の全国に及ぶ組織が機能するよう、つながりをさらに盤石なものにする必要がある。全国につながる本会の組織は、幼児教育の諸問題に対し、実態把握を包括的に行い、結束して解決に力を尽くす。また、災害支援においても迅速にその力を発揮している。さらに、各都道府県・市区町村の幼稚園・こども園長会の活動を通して、情報の共有化、事業の活性化等、組織の強化を図り、全国国公立幼稚園・こども園ＰＴＡ連絡協議会及び関係諸機関との連携を密にしてリーダーシップをとって諸課題の解決に努めていく。また、引き続き東日本大震災等の自然災害や、新型コロナウイルス感染症のような緊急事態での教訓を基に、教育活動の一層の充実や安全な教育施設の整備に向けて、関係諸機関への働き掛けを行う。

以上の活動方針に基づき、次に掲げる事項を本年度の活動の重点とする。

【活動の重点】

1　幼児教育の質の維持・向上とリーダーシップの発揮

・幼稚園教育要領等の理解を深め、遊びを中心とした生活の中で体験を通して学ぶ幼児教育の本質を踏まえた指導内容・方法・教材及び評価の改善等を工夫し、質の高い教育を推進する。幼児教育の重要性を広く伝え、多くの理解と協力を得て国公立幼稚園・こども園のさらなる発展に努める。

・新型コロナウイルス感染症拡大防止をきっかけとする新しい生活様式やSociety 5.0時代に対応した諸条件の整備を講じる。幼児期の教育にふさわしいＩＣＴ活用が可能な環境整備の普及を推進する。

・国公立幼稚園・こども園が地域における幼児期の教育の核として、地域の小学校を始め様々な教育施設・発達段階に沿った保育者の援助～機関との連携を推進するとともに、研修・研究の機会を充実させるリーダー的な役割を担う。

・学校評議員等の設置率を一層高め、よりよい教育の創造に資する学校評価を確実に進める。

2　優秀な人材確保と保育者（幼稚園教諭・保育教諭・保育士）の資質及び専門性の向上

・幼児の成長を支える保育者という仕事に誇りをもった志の高い人材を確保できるよう、養成段階から採用までの一体的な取組の実現を関係各所に働き掛ける。

・人権感覚を磨き、学び続ける姿勢をもった保育者を育成するために、研修体制の一層の充実や免許の上進等について地域の教員・保育士養成課程を有する大学や幼児教育研究団体等との連携を図り、保育者の資質及び専門性の向上に資する研修の機会の保障に努める。

・教育・保育の多様な課題に柔軟に対応できる実践力のある保育者を育成するため、国の動向や幼児教育の重要性等最新の情報を会員園に発信し、各園長がリーダーシップを発揮できるよう支援する。

・幼児教育センターや教育アドバイザーが果たす役割の重要性を訴え、各地域の研修の充実を図る。

3　３年保育実施の拡大と新しい生活様式に即した学級規模の実現

・希望する全ての幼児が学校教育としての幼児教育を受けられるよう関係諸機関へ働き掛け、３年保育実施の拡大を図る。

・新しい生活様式に基づき質の高い幼児教育の実現を図るために、１学級30人以下の適切な学級規模と、その学級数に見合う正規職員の担任配置を関係各所に働き掛ける。

4　家庭や地域社会の教育力の向上と子育ての支援に関わる取組の推進

・親子の居場所づくりや子育ての支援の推進、保育所・子ども家庭支援センター等との連携、預かり保育の充実等、地域の実状に応じた子育ての支援を推進する。

・保護者が教育活動に参画できる機会を提供し、保護者の教育力を生かした園経営を推進することで家庭の教育力向上を支える。

・ＰＴＡ等の組織と連携を図り、家庭や地域との豊かなつながりの中で親と子が共に育つ場を提供する。また、「身近な自然との関わりを通して子どもの豊かな感性を育むための調査研究」を行い、その成果や提言を情報として発信し、子育ての支援を充実させ園経営の推進を図る。

5　教育・保育の充実のための条件整備

・様々な自然災害や感染症等の不測の事態に、全国組織を生かした迅速かつ適切な対応ができるようオンライン環境の整備推進を働き掛け、非常時における教育・保育を保障する。また施設の安全性を高めるため引き

続き関係諸機関に働き掛けるとともに、被災地への積極的な支援活動を行う。

・保育者が仕事と生活を両立させながら従事できる勤務体制の改善や人的・物的な条件整備が図られるよう、各都道府県・市区町村の状況に応じて、全国国公立幼稚園・こども園ＰＴＡ連絡協議会等と連携し、関係諸機関に積極的に働き掛ける。

・学校教育の一翼を担う教職員の職責に相応する適正な処遇を得て、資質の高い意欲的な保育者や関係職員が確保されるよう、要望活動の強化に努める。

・働き方改革が実現できるよう、事務作業の効率化のＩＣＴ整備や感染症対応における人的配置と増員等、勤務環境整備のための支援について要望活動を積極的に進める。

・特別支援教育の充実に向け、人的・物的な条件整備が図られるよう、更に関係諸機関に働き掛ける。

6　高知県国公立幼稚園・こども園会の充実

・少子化に伴う園児数の減少とともに、幼児教育無償化の実施に伴う預かり保育の必要性の高まり等による「こども園」への移行が少しずつ増えてきている。このような社会の変化の中で、本会においても組織運営や研修会のあり方を見直し、一層の団結力をもって幼児教育の質の向上に努める。

・幼児教育の重要性をアピールするために『幼稚園・こども園ウィーク』の取組を、地域の実態に合わせて工夫し内容の充実を図っていく。

・高知県少子化対策推進県民会議に参加し、子育て支援の一翼を担うようにする。

・来年度に『第25回四国国公立幼稚園・こども園長研究会』を高知県で開催する予定である。“四国はひとつ”という思いのもと四国の園長連絡協議会と情報交換をするとともに、県内では、高知大会開催に向けて結束して活動を行う。

・コロナ禍のなか、安心安全な幼児教育を目指し、子どもの健やかな育ちを保障していく。

主要行事

⑴　高知県国公立幼稚園・こども園会・評議員会（附属幼稚園・オンライン開催）・・・・ 4/21・2/28
⑵　高知県国公立幼稚園・こども園会・理事会（附属幼稚園・オンライン開催）・・・・・ 4/21・2/28
⑶　高知県国公立幼稚園・こども園会総会　研究大会（オンライン開催）・・・・・・・・ 5/22
⑷　研究推進委員会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5/22・12/24・3/9
⑸　主任等研修会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2/7
⑹　園長研修会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8/25
⑺　高知県国公立幼稚園・こども園ＰＴＡ研究大会（芸西幼稚園　オンライン開催）・・・ 10/20
⑻　2021全国国公立幼稚園・こども園ウィーク　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11/13～19
⑼　高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会（幼保連携型認定こども園にじいろ園）・・ 11/19

県外会議

⑴　全国国公立幼稚園・こども園長会・理事会（オンライン開催）・・・・・・・・・・・ 6/4・2/4
⑵　全国国公立幼稚園・こども園長会・都道府県会長会（オンライン開催）・・・・・・・ 11/18
⑶　四国国公立幼稚園・こども園長会連絡協議会・理事会　・・・・・・・・・・・・・・ 7/13・11/6

全国大会

⑴　第72回全国国公立幼稚園・こども園長会総会・研究大会静岡大会（オンライン開催）・ 6/4
⑵　第68回全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会　岡山大会（オンライン開催）・・ 7/27・7/28
⑶　第59回全国国公立幼稚園・こども園ＰＴＡ全国大会　新潟大会（オンライン開催）・・ 8/8

令和３年度役員名簿

役　職　名	氏　名（所　属）
会　長	古味　美和（野市幼稚園）
副　会　長	須内　富（越知幼稚園）
副　会　長	國澤　千陽（芸西幼稚園 ）
副　会　長	橋本　鈴子（伊野幼稚園）
監　事	宮﨑　啓子（たちばな幼稚園）
監　事	門田　清子（幼保連携型認定こども園たのの）
東部支部長（理　事）	臼木　美佳（香我美幼稚園）
高知支部長（理　事）	中山　美香（附属幼稚園）
中部支部長（理　事）	上田　佳代（かがみ幼稚園）
高岡支部長（理　事）	西村　玉子（幼保連携型認定こども園梼原こども園）
研究部長（理　事）	中山　美香（附属幼稚園）
副部長・東部支部	甲藤　真理（香我美幼稚園）
副部長・中部支部	小泉　清人（幼保連携型認定こども園ごほく）
副部長・高岡支部	福井めぐみ（幼保連携型認定こども園さくらんぼ園）
主任等部会　部　長（理 事）	竹村　美恵（たちばな幼稚園）
〃　副部長	矢田　崇洋（附属幼稚園）
〃　副部長	石川　真帆（幼保連携型認定こども園梼原こども園）
事　務　局	竹村　美恵（たちばな幼稚園）
顧　問	岡村　昭夫　・　山中千枝子　・　宮田　信司 鍋島　亨子　・　有田　尚美

令和３年度支部構成

支部名	幼稚園・こども園数	幼稚園・こども園名
東部支部	８園	(認)なはり　田野　(認)安田さくら園　芸西　夜須　香我美　野市東　野市
高知支部	１園	附属
中部支部	５園	(認)えだがわ　伊野　(認)ごほく　かがみ　たちばな
高岡支部	５園	越知　(認)にじいろ園　(認)さくらんぼ園　(認)梼原こども園　(認)たのの

令和３年度研究推進委員・研究員名

支部名	推進委員	研究員
東部支部	三谷　聡幸	竹村えりな　・　松尾　浩一　・　田本　愛花　・　中野　聖文 濱口　詠子　・　今上菜津美　・　岡本　宏枝
高知支部	岡谷　里香	
中部支部	宮地　里佳	長﨑　有紀　・　岩元　琴音　・　田村　真紀　・　野村　航大
高岡支部	川上　真希	福井めぐみ　・　堀内　葉月　・　林　千佳　・　玉川　美穂

Ⅱ　令和３年度高知県国公立幼稚園・こども園会園長等部会

事業報告

⑴　第１回　国公立幼稚園・こども園会園長等部会（オンライン開催）夏季研修

日時　令和３年８月25日（水）　14：00～17：00

会場　各園にてオンライン会議

議題　・会務報告

⑴　第72回全国国公立幼稚園・こども園長会総会・研究大会　静岡大会（オンライン開催）

⑵　全国国公立幼稚園・こども園長会　第１回正副会長・ブロック会長会

⑶　全国国公立幼稚園・こども園長会　第２回常任理事会（オンライン開催）

⑷　第68回全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会　岡山大会（オンライン開催）

⑸　高知県国公立幼稚園・こども園ＰＴＡ大会　　芸西村立芸西幼稚園

⑹　特別事業委員会　四国ブロック研修会　　いの町立幼保連携型認定こども園ごほく

⑺　高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会　　津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園

・提案

⑴　ポスターセッションについて

⑵　コロナ感染症対応の目安について

⑶　今後の輪番制について

⑷　四国国公立幼稚園・こども園長研究会　高知大会について

・夏季研修（ZOOM 会議）

講話　「園内の環境構成の充実に向けて～主体的・対話的で深い学びを求めて～」

講師　（公社）全国幼児教育研究協会顧問

高知県幼保支援スーパーバイザー　　岡上　直子　先生

⑵　研究会・研修会への参加・他

① 第72回全国国公立幼稚園・こども園長会総会・研究大会　静岡大会　（オンライン開催）　6/4

② 全国国公立幼稚園・こども園長会第４回（旧）常任理事会・第１回理事会
第１回（新）常任理事会　（オンライン開催）　6/4

③ 全国国公立幼稚園・こども園長会第１回正副会長会・ブロック会長会
第２回常任理事会　（オンライン開催）　7/8

④ 四国国公立幼稚園・こども園長会連絡協議会（高知県）　第１回理事会　（書面開催）　7/13

⑤ 第68回全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会　岡山大会　（オンライン開催）　7/30

⑥ 高知県国公立幼稚園・こども園ＰＴＡ大会　　芸西村立芸西幼稚園　（オンライン開催）　10/20

⑦ 四国国公立幼稚園・こども園長会連絡協議会（高知県）　第２回理事会　11/6

⑧ 特別事業　四国ブロック研修会　　いの町立幼保連携型認定こども園ごほく　11/13

⑨ 全国国公立幼稚園・こども園ウィーク各園で実施　（11/13～11/19）

⑩ 第３回常任理事会・都道府県会長会　（オンライン開催）　11/18

⑪ 高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会　津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園
（オンライン開催）　11/19

⑫ 全国国公立幼稚園・こども園長会第２回正副会長・ブロック会長会　（オンライン開催）　11/19

⑬ 全国国公立幼稚園・こども園長会第３回正副会長会・ブロック会長会・ブロック会長会
（オンライン開催）　2/3

⑭ 全国国公立幼稚園・こども園長会第２回理事会　（オンライン開催）　2/4

Ⅲ　令和３年度高知県国公立幼稚園・こども園会主任等部会

1　事業報告

⑴　令和３年度主任等部会総会

日時　令和３年５月　＊書面にて報告・承認

内容　・令和３年度事業報告及び決算報告

・役員改選

・令和３年度事業報告及び予算案

⑵　第１回研修会（夏季研修）

＊新型コロナウイルス感染拡大防止のため開催中止

⑶　第２回研修会（保育参観・研究協議）

＊新型コロナウイルス感染拡大防止のため開催中止

⑷　第３回研修会（情報交換）

日時　令和４年２月７日（月）　15：00～16：00

場所　各役員・企画委員参加会場において　Zoomによるオンライン研修

内容　・情報交換会（各園の取り組み報告）

⑸　令和３年度高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会

日時　令和３年11月19日（金）　Web開催

会場　津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園

⑹　第１回企画委員会

日時　令和３年５月13日（木）　16：00～17：00

場所　いの町立伊野幼稚園

内容　・令和２年度のまとめと反省

・令和３年度の事業計画など

⑺　第２回企画委員会

日時　令和４年２月７日（月）　16：00～16：30

場所　各役員・企画委員参加会場において　Zoomにて開催

内容　・令和３年度研修のまとめ

・令和４年度に向けて（新役員について）

・その他

その他研修

日時　令和３年11月～12月

内容　・引き渡し訓練について各園の取り組み冊子作成

Ⅳ　令和３年度高知県国公立幼稚園・こども園会　研究部

１．研究主題と研究方針

幼稚園教育要領等が改訂施行されて４年目、研究主題を昨年度から引き続き「５領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」とし、各支部の教育実践の向上につながる研究を進めていくこととしました。

２年目となる本年度は、昨年度の成果と課題を基に研究をスタートすること、研究主題を明らかにするために各支部で研究方法を工夫すること、実際の保育を見ていない他支部の会員にも研究成果が伝わるようなまとめ方を工夫することを目標に取り組んできました。昨年度の課題として共有した、東部支部の「教師が幼児をどう捉え理解していくかによって５領域の捉え方や10の姿へつながっていく教師の援助、環境構成も大きく変わってくる」、中部支部の「事実に基づいた幼児理解ができる保育者の目を養うことが必要である」「各年齢の各時期に経験させたいことは何かを確かめながら、10の姿につながる援助と環境構成について、より具体的に捉えていくことが大切である」、高岡支部の「10の姿を意識するあまり安易に当てはめてないかを、子どもの姿に立ち返りながら協議を深めていくことが大切である」は、研究を通して得られた成果でもあり、本年度解決につながる方策を見出したい目標でもあります。

これらの目標に向かって、幼児の生活の日常性を大切にしながら、教師の予想を超えた活動の展開をも生かし、環境の再構成や記録し省察することを大切に、研究を進めていくこととしました。

２．研究経過

実施日	会　　場	内　　容
４月下旬	高知大学教育学部附属幼稚園	「令和２年度幼児教育のあゆみ」を各園に郵送
５月22日	高知大学教育学部附属幼稚園（Zoom）	第１回研究推進委員会 研究計画・研究テーマについて 研究の進め方について
７月13日	幼保連携型認定こども園にじいろ園	高岡支部研 保育、指導案について
10月14日	高知大学教育学部附属幼稚園	高岡支部研 保育、指導案について
10月21日	幼保連携型認定こども園にじいろ園	高岡支部研 保育、指導案、研究大会の進め方について
11月19日	幼保連携型認定こども園にじいろ園（Zoom）	教育研究大会 保育、指導案について
12月24日	高知大学教育学部附属幼稚園（Zoom）	第２回研究推進委員会 各支部の研究資料の報告・協議
３月９日	高知大学教育学部附属幼稚園（Zoom）	第２回研究推進委員会 各支部の研究資料の検討、「幼児教育のあゆみ」のまとめ 令和４年度の研究テーマについて・３年度反省

3．各支部の研究の取り組み

14ページからの各支部の研究報告

4．研究の概要

東部支部は、今年度も動画を活用し事実を基に幼児の姿を正確に捉えることを大切にしたいと考えながら研究を進めています。そのなかで、多面的な幼児理解につながるような協議方法を工夫し、幼児一人一人が発達に必要な経験を得られるための環境構成や教師の援助について研究事例を基に探っています。６月の研究保育では、動画記録を活用しながら対象幼児への理解を深め、その言動につながった理由を考えています。わずか１分40秒程度の保育場面ですが、それまでの遊びの展開や担任教師の対象幼児に対する思いなどから、この瞬間だけの幼児理解にならないようにしており、幼児期の教育における幼児理解の大切なポイントが示されています。また、「Ａ児は道具を選んで使っていたのか」「なぜＡ児はペットボトルを５回振ったのか」など、協議で出された視点をそのままにまとめているため、保育を観ていない会員も協議内容を理解しやすく、共に考える仲間となりながら読み進めることができます。そして、「Ａ児が経験していたことをもとに、明日からの保育について考える」では、肯定的眼差しのなかで捉えたＡ児の経験に対して、必要と思われる環境構成や教師の援助について具体的に手立てを整理しています。そこには、現状を丁寧に捉えつつスモールステップで育っていく幼児の姿を具体的に描きながら適切な願いをもった教師の姿を読み取ることができます。近年、幼児の姿からこの適切な願いをもつことが難しくなっている教師が少なくありません。東部支部の研究が、これらの課題解決につながることを願います。

中部支部では、幼児期の教育の基本である環境に視点を当てて研究を進めています。具体的には、研究保育で得られた幼児の姿を５領域の内容と10の姿に結び付けながら経験していることを捉え、その姿につながった物的環境と人的環境について掘り下げることで研究主題に迫ろうとしています。研究のまとめでは、これまであまり見られなかった環境構成の図や写真を用いながら整理し、幼児にとっての環境構成の意味がまとめられています。ややもすると、こうすれば上手くいくといった手法に陥りやすい環境構成ですが、準備した環境に幼児がどのように関わりながら遊びを展開していたのか、その具体的な幼児の姿を通しながら環境の意味を問い直したり、捉え直したりすることが大切です。事例１では「自分なりのイメージをもって、工夫したり試したりしている姿から」、事例２では「自分達で遊びを進めようとしている姿から」、その日の環境構成の意味を問い、整理しています。このように、具体的な幼児の姿を通して振り返っていくことで、幼児の学びにつながる環境構成であったのか、教師の込めた教育的意図はどのように幼児に受け取られたのかなどを考える機会となり、次に求められる環境構成も具体性を帯びてくるように思います。若い研究員を中心に、研究事例をもとに協議を重ねながら進められた研究が、各園における日々の実践につながったことは、幼稚園教育要領解説等に示されている「環境を通して行う教育の意義」や「幼児の主体性と教師の意図」、「環境を通して行う教育の特質」への理解を深めることにもつながったと思います。ここに中部支部の研究が大きな意味をもつことが分かります。

高知支部では、学級や学年ごとに教育活動として位置付けて行われている集団活動を取り上げ、幼児の姿や学びについて10の姿を通して整理しながら、研究を進めています。しかし、それは単に集団活動で行った製作の一場面を取り上げて幼児理解をしたり保育のあり方を検討したりするのではなく、幼児の興味関心に基づいて遊びが選択される好きな遊びの時間とのつながりのなかで、10の姿を手掛かりに幼児の姿や学びについて考察しています。この研究から分かるのは、教師が設定した活動に話を聞いて理解して取り組み自分の力を高めてほしいと願っている集団活動であっても、それは決して教師の一方的な願いや思いから設定されるものではなく、毎日幼

児と生活を積み重ねていくなかで得られる幼児理解に基づき、幼児の興味や関心、幼児同士の関わり合いの状況を考慮して教材選択と活動展開が行われることが重要であるということです。また、考察で述べられている今後求めていきたいねらいや内容、10の姿などから、次の育ちを具体的かつ適切に描き願いながら保育のあり方を検討することの重要性が分かります。まとめにもあるように、集団活動で気付いたことを好きな遊びの時間に生かしながら遊ぶことは、幼児の工夫や試行錯誤への経験につながり、学びを深めていきます。好きな遊びと集団活動とが往還し、互いの活動が豊かになるように、この研究が今後の保育実践で生かされることを願います。

高岡支部では、研究保育のねらいに合った場面を取り上げながら、幼児理解を深め、日々の保育に必要な環境構成や教師の援助について探り、研究を進めています。他の支部が１つの学年を取り上げて研究を進めているのに対し、高岡支部では３～５歳児の保育をそれぞれ取り上げ、研究主題に迫る協議の中で見出された内容を、図や写真を用いながら分かりやすくまとめています。各場面の遊びを通して幼児が楽しんでいること（経験していること）を、５領域の内容と10の姿とのつながりで整理し、幼児理解を行っています。５領域や10の姿が、互いに関連し合いながら幼児の姿として現れていることが、このまとめからも分かります。幼児の目線で写真・ビデオを撮り、時系列で振り返るなかで、個々の様子を確認し、人や物との関わり、表情や目線などから内面を推し量っていった研究方法が、こうしたまとめにつながったと思います。11月の教育研究会では、直接保育を観てもらっての協議は難しくなりましたが、オンラインでの実施に挑戦してくださり、高岡支部から高知県下の国公立幼稚園・こども園とつながって開催できたことは、大きな成果でした。この教育研究会で得られた協議のまとめから、協議の構成メンバーが変わると幼児の姿の読み取りも異なり、より多面的な理解につながることが分かります。このように、園や支部を超えて協力し、話し合うことは、教師としての専門性を高めることにつながります。今後も、会員同士が各々の違いを尊重しながら協力し合える開かれた関係をつくり出していき、教師としての専門性を高め、各園における教育を充実していきたいと思います。

令和３年度の研究主題は、「５領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」として、各支部で昨年度の課題を解決しつつさらに研究を深められるよう取り組んできました。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、思ったように研究が進められない現状もありましたが、それぞれにできることを検討し、実施できたことは幸いでした。全支部が、昨年度以上の成果を上げ、この２年間の研究を通して新たに幼稚園教育要領等の各領域のねらいや内容に示された視点や、10の姿への理解も深めることができたと思います。

令和４年度の研究主題は、「幼児期の教育において育みたい資質・能力につながる環境構成と保育者の援助について～知識・技能の基礎に着目して～」とし、この２年間の研究を足掛かりにさらに研究を進めていきたいと思います。幼児の学びの読み取りから幼児期に求められる保育を考える研究は、幼児一人一人に豊かな体験を通じて感じたり気付いたり分かったりできるようになったりする「知識・技能の基礎」を育む実践力につながることと思います。幼児期の教育において育みたい資質・能力として示されている「知識・技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」は、一体的に育まれていきます。そのため、令和４年度から３年間を通して着目する視点を変えながら研究を進め、各資質・能力への学びを深めるとともに、各支部、各園の教育実践の向上につなげていきたいと思います。

令和３年度　高知県国公立幼稚園・こども園会研究大会

幼児期にふさわしい園生活を目指して

～絵本や手遊びの役割～

R3．5．22（土）
十文字学園女子大学
桶田　ゆかり

1．幼児教育の基本　(1) 幼児教育の不易

幼稚園教育要領等の改訂
（継続すること・変えられないもの・変えてはいけないもの）

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するために、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。

幼稚園教育要領　第１章総則 第１幼稚園教育の基本

1．幼児教育の基本　(1) 幼児教育の不易

① 幼児期にふさわしい生活の展開

- 教師との信頼関係に支えられた生活
  - ☜ 絵本や手遊びは、保育者への親しみ・信頼関係を築く
- 興味や関心に基づいた直接的な体験が得られる生活
  - ☜「直接的な体験を促す」「補完する」もの
- 友達と十分に関わって展開する生活
  - ☜友達との出会い・関わり・気持ちの交流を生むもの

② 遊びを通しての総合的な指導

③ 幼児一人一人の特性に応じた指導

幼稚園教育要領　第1章総則 第1幼稚園教育の基本

1．幼児教育の基本　(2) 幼児教育の流行　＝　不易を支え・充実させる

◎ 幼児教育において育みたい「資質・能力」

◎ 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

◎ 主体的・対話的で深い学び

◎ カリキュラム・マネジメント

幼稚園教育要領

「生きる力」

各学校種における「資質・能力」

「生きる力」の基礎

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

幼児期の教育における「資質・能力」

知識・技能の基礎　思考力・判断力・表現力等の基礎
学びに向かう力・人間性等

幼児の自発的な活動としての遊びを中心とした生活

幼稚園教育要領　幼保連携型認定こども園教育・保育要領　保育所保育指針

1．幼児教育の基本　(2) 幼児教育の流行　＝　不易を支え・充実させる

◎ 幼児教育で育みたい「資質・能力」

- 豊かな体験を通じて、**感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったり**する …　『**知識及び技能の基礎**』（気付く力）
- 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、**考えたり、試したり、工夫したり、表現したり**する …　『**思考力、判断力、表現力等の基礎**』（考え工夫する力）
- 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする …　『**学びに向かう力、人間性等**』（意欲・意思をもって取り組む力）

1．幼児教育の基本　(2) 幼児教育の流行　＝　不易を支え・充実させる

知識・技能の基礎（気付く力）

豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする

- 基本的な生活習慣や生活に必要な技能の獲得
- 身体感覚の育成
- 規則性、法則性、関連性などの発見
- 様々な気付き、発見の喜び
- 日常生活に必要な言葉の理解
- 多様な動きや芸術表現のための基礎的な技能の獲得　等

思考力・判断力・表現力等の基礎（考え工夫する力）

気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする

- 試行錯誤、工夫　・予想、予測、比較、分類、確認
- 他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさ
- 言葉による表現、伝え合い
- 繰り返し、次への見通し
- 自分なりの表現　・表現する喜び　等

遊びを通しての総合的な指導

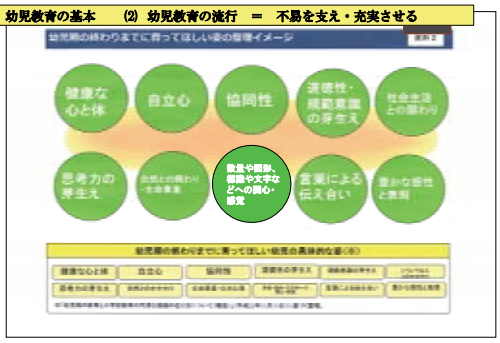
心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする

- 思いやり　・安定した情緒　・自信　・相手の気持ちの受容
- 好奇心、探究心　・葛藤、自分への向き合い、折り合い
- 話し合い、目的の共有、協力
- 色・形・音などの楽しさや面白さに対する感覚
- 自然現象や社会現象への関心　等

学びに向かう力、人間性等（意欲・意思をもって取り組む力）

三つの円の中で例示される資質・能力は、五領域の「ねらい・内容」及び「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」から主なものを取り出し、便宜的に分けたものである。

1．幼児教育の基本　(2) 幼児教育の流行　＝　不易を支え・充実させる



1．幼児教育の基本　(2) 幼児教育の流行　＝　不易を支え・充実させる

◎ 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

(9) 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、
絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、
言葉による伝え合いを楽しむようになる。

2．絵本や手遊びの特性　(1) 教材研究とは

各幼稚園では、教材研究を通して、幼児と教材の関わりについて理解を深め、遊びが展開し充実していくような豊かな教育環境の創造に努めることが必要である。

幼稚園教育要領解説　P46

幼稚園教育における教材研究は、幼児の周りにある様々なものの教育的価値を見いだし、整理し、実際の指導の場面で必要に応じて構成したり活用したりできるようにするための準備である。

幼児期から児童期への教育　P47

2．絵本や手遊びの特性　(1) 教材研究とは

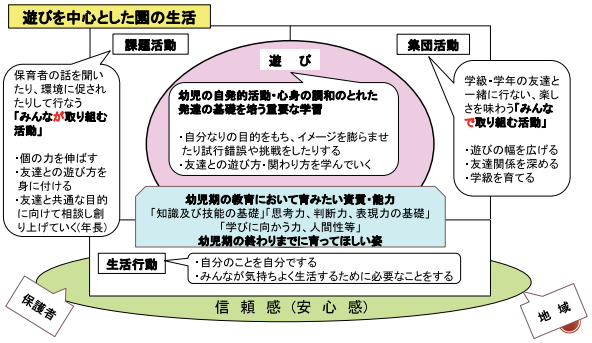
教材研究とは…

その教材のもつ特性・楽しさ・面白さを実際に扱って調べ、

目の前にいる子どもたちにとって

➡ ふさわしいものであるか確認すること

➡ ふさわしいものになるように手を加えること



2．絵本や手遊びの特性　(2) 絵本の特性

① 情緒の安定を図る
- 個々に関わることで安定できる。
- 友達とかたまれることで安定できる。
- 保育者との関係をつくる媒体となる。
- 学級全体の中で安定を見出すことができる。

② 友達関係が育つ
- 一緒に過ごす心地よさ・一緒に行動する楽しさを味わう。
- 絵本の楽しさを共有したり絵本から感じたことに共感したりする。

③ 豊かな想像性を養う
- 幼児の内面にあるイメージをふくらませる。

2．絵本や手遊びの特性　(2) 絵本の特性

④ 豊かな情操の芽生えを培う
- 喜怒哀楽、様々な感情を呼び起こす。

※情操…美しいもの、すぐれたものに接して感動する情感豊かな心

⑤ 知的欲求を満たす
- 知識を得る。
- 直接的な体験を補完する。
- 興味や関心を満たす。
- 興味や関心のもととなる。

2．絵本や手遊びの特性　(2) 絵本の特性

【配慮事項】

※幼児が絵本から感じ取ることを大切にする。
解説や説明が幼児のイメージを壊さないようにする。

※学級全体への読み聞かせだけでなく、一人で、または友達とじっくりイメージの世界に浸ることのできる場や機会を確保する。

※絵本で教えよう・気付せよう・覚えさせようとしない。

※絵本の言葉を大切にする。
同時に、言葉ではない行間・余白・雰囲気・余韻等を大切にする。

2. 絵本や手遊びの特性　(3) 手遊びの特性

※ 手遊びは、言葉と音楽の融合

- 歌やリズム・言葉に合わせて自分の手や体を動かす楽しさが味わえる。
- 自分の気持ちを発散できる。
- 言葉自体・リズミカルな言い方・言葉のやりとりの面白さが味わえる。
- 友達と声や動きがそろう・合わさる気持ちよさが味わえる。
- 先生と自分・学級全体での楽しさを共有できる。
- 同じ手遊びでも工夫して繰り返し楽しむことができる。

2. 絵本や手遊びの特性　(2) 絵本の特性

【配慮事項】

※楽しむ活動なので、きちんとさせる・覚えさせることに重点をおき過ぎない。見てやっているつもりで楽しめることも大切である。楽しければ、繰り返しの中で覚えていく。

※幼児がイメージをもって歌い動くことを大切にする。

※次の活動のため、静かにさせるための活動にしない。
手遊びそのものが楽しめることを大切にする。

※年齢や経験により運動能力(指先・体の動きなど)や理解力に個人差があることを考えて、楽しくできる内容を選択する。

3. 幼稚園教育要領から　(1) 言語活動の充実

(3)言語に関する能力の発達と思考力等の発達が関連していることを踏まえ、幼稚園生活全体を通して、幼児の発達を踏まえた言語環境を整え、言語活動の充実を図ること。

幼稚園教育要領解説　P110

・遊びの中で、歌や手遊び、絵本や紙芝居、しりとりや言葉を集める言葉集め、カルタ作りなどといった活動を意図的に取り入れ、幼児が言葉に親しむ環境を工夫し言語活動を充実させていくことが大切である。

☜ 絵本も手遊びも「言語活動」である。楽しむことで言葉の獲得や理解、適切な使い方につながる。

3. 幼稚園教育要領から　(2) 保育者の役割

その際、教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。

幼稚園教育要領　第1章の幼稚園教育の基本　の最後

3. 幼稚園教育要領から　(2) 保育者の役割

◎ 保育者の役割

○ 遊びを生み出すために必要な教育的環境を整える。

○ 集団の中で個々を育て、個々を育てながら集団を育てる。

○ 保育者等の協力体制のもと、幼児を育む。

◎ 保育者の関わり

・活動の理解者　・共同作業者　・共鳴者

・モデル　・援助者　　等

3. 幼稚園教育要領から　(3) 5領域との関係

手…手遊びと関連するもの　絵…絵本と関連するもの

《言　葉》

1 ねらい

(1)自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。…手・絵

(2)人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。…手・絵

(3)日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。…絵

3. 幼稚園教育要領から　(3) 5領域との関係

《言　葉》

2 内容

(1)先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。…手・絵

(2)したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。…絵

(3)したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。…絵

(4)人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。…絵

(7)生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。…手・絵

(8)いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。…手・絵

(9)絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。…絵

3. 幼稚園教育要領から　(3) 5領域との関係

《健　康》

1 ねらい

(1)明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。…手

2 内容

(1)先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。…手・絵

3. 幼稚園教育要領から　(3) 5領域との関係

《人間関係》

1 ねらい

(2)身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。
…手・絵

2 内容

(1)先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。…手・絵
(5)友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。…絵
(6)自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
…絵
(7)友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。…手・絵

3. 幼稚園教育要領から　(3) 5領域との関係

《環　境》

1 ねらい

(3)身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。…手・絵

2 内容

(3)季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。…絵
(8)日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。…手・絵
(9)日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。…絵

3. 幼稚園教育要領から　(3) 5領域との関係

《表　現》

1 ねらい

(3)生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。…手　絵

3. 幼稚園教育要領から　(3) 5領域との関係

《表　現》

2 内容

(1)生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。…手・絵
(2)生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。…手・絵
(3)様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。…絵
(6)音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。…手
(8)自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。…絵

幼児期の発達特性と学級経営

３歳児	４歳児	５歳児
「私」の世界 集団生活の中で一人一人が安定する学級づくり	「私も」の世界 それぞれが自己主張でき、受け入れ合う学級づくり	「みんな」の世界 葛藤や挫折を体験し自他の思いを知り、友達と思いを伝え合いながら互いのよさを認め合い、育ち合う学級づくり

＝ 子どもらが帰った後 ＝

子どもが帰った後、その日の保育が済んで、まずほっとするのはひと時。大切なのは それからである。

子どもといっしょにいる間は、自分のしていることを反省したり、考えたりする暇はない。子どもの中に入り込み切って、心に一寸の隙間も残らない。ただ一心不乱。

子どもが帰った後で、朝からのいろいろのことが思いかえされる。われながら、はっと顔の赤くなることもある。しまったと急に冷汗の流れ出ることもある。ああ済まないことをしたと、その子の顔が見えてくることもある。　一体保育は…。一体私は…。とまで追い込まれることも屢々(しばしば)である。

大切なのは、此の時である。此の反省を重ねている人だけが、真の保育者になれる。翌日は一歩進んだ保育者として、再び子どもの方へ入り込んでいけるから。

倉橋惣三先生「育ての心」より

東部支部

研究主題　「５領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

１．研究にあたって

東部支部は、昨年度４園の取り組みを支部内で共有しながら研究を進めていく中で、幼児の捉え方や理解の違いによって、５領域や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下「10の姿」という）につながる環境構成や教師の援助が大きく変わることを痛感し、改めて幼児理解の大切さと難しさを感じた。そのため、事実を正確に捉えるための工夫として写真や動画を使っての事例作成や協議を行った。また５領域や教育課程、長期の指導計画などを活用しながら、幼児の姿を多面的に捉えられるようにしたことを、学びとして共通理解した。

昨年度の学びを生かし、さらに幼児理解を深め主題に迫っていくために、今年度も動画を使って事実を基に幼児の姿を正確に捉えることを大切にしていきたいと考えた。また協議では多面的に幼児理解ができるような方法を用いながら、幼児が発達に必要な経験をするための環境構成や教師の援助について探っていくことにした。

２．研究の進め方

○東部支部８園で各１名の研究員、研究副部長を中心に研究を進める。

○香南市立野市東幼稚園の４歳児の研究保育についての協議を行い、幼児が楽しんでいることや経験していることなどの場面を共有しながら幼児の姿を捉える。

○動画や当日の記録、ボイスレコーダーなどを用いて研究保育の中の一場面を選び、事例を作成する。その事例の中の幼児の行動、表情、つぶやきなどを捉え根拠を挙げながら、幼児が楽しんでいることや経験していることについて協議し幼児理解を深める。

○研究員会での協議内容を自園へ持ち帰って報告し、各園で話し合ったことを再び持ち寄って協議することにより、支部全体で共有しながら研究主題へと迫っていく。

３．研究経過

実施日	会　　場	内　　容
４月２日	夜須公民館	支部総会及び研究会 （役員選出・研究の方向及び主題の確認・研究員会）
４月27日	芸西村立芸西幼稚園	第１回研究員会 （研究主題の共通理解・支部サブテーマについて 研究計画・夏季研修について）
５月22日	高知大学教育学部附属幼稚園	第１回研究推進委員会（研究のすすめ方について）（Zoom）
６月７日	香南市立野市東幼稚園	第２回研究員会（東部支部研究会に向け事前検討、協議内容決定）
６月10日	香南市立野市東幼稚園	東部支部研究会　　研究保育・研究協議（４歳児） 助言者：高知大学教育学部附属幼稚園　前副園長 谷脇のぞみ　先生

7月26日	芸西村立芸西幼稚園	第3回研究員会（東部支部研究会での協議、事例検討）
11月2日	芸西村立芸西幼稚園	第4回研究員会（研究協議・研究にあたってについて）
11月15日	芸西村立生涯学習館	第5回研究員会（事例検討・研究のまとめに向けて）
11月19日	幼保連携型認定こども園 にじいろ園	高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会（Zoom） 研究協議（動画視聴・グループ協議）
12月7日	芸西村立生涯学習館	第6回研究員会（事例検討・研究のまとめに向けて）
12月24日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第2回研究推進委員会 「幼児教育のあゆみ」のまとめ方について検討（Zoom）
1月6日	香南市立香我美幼稚園	第7回研究員会（東部支部資料について協議） 東部支部研修　実技『幼児期の運動遊び』（延期された夏季研修）
3月9日	高知大学教育学部 附属幼稚園	第3回研究推進委員会 「幼児教育のあゆみ」のまとめ方について検討

4．研究内容

6月10日（木）　野市東幼稚園　4歳児もも組　12名

本日のねらい◎と内容○（抜粋）

○水、泡、泥、砂の感触を味わいながら、自分なりに試したり、繰り返し作ったりすることを楽しむ。

・石けんを削ったり、泡立て器で混ぜて泡を作ったり、色水と混ぜようとしたりする。

・土と水を手足で混ぜたり、できた泥で団子やごちそうを作ったりする。

○友達に自分の思いを伝えながら、同じ遊びに興味をもった友達と関わって遊ぶことを楽しむ。

・友達と同じ場で作ったり、できたものを見せ合いながら遊んだりする。

・好きな役になって、お家ごっこやお店屋さんごっこをする。

協議の視点

① 子どもがどのようなことに興味をもって関わり、どのように遊んでいたか。
どのようなことに楽しさを感じていたか、どのような経験をしていたか。
また、5領域のどの部分につながっているのか。

② ①の姿が見られたのは、どのような援助や環境構成があったからか。

③ 明日の保育につなげていくための環境構成や教師の援助
（“明日に…”を意識して、出来るだけ細かく）

協議内容

その日の協議では、ほとんど言葉を発することなく黙々と泡遊びをしていたA児が楽しんでいたことについて話が出る中で、研究員間での姿の捉えに違いが見られた。このことが幼児理解の深まりにつながっていくのではないかと考え、A児の姿を通して今後の研究を進めていくように確認し合った。

⑴　再度動画でＡ児の姿（事実）を捉え直し研究員で共有

Ａ児は、泡遊びを始めて３日目になる。この日も園庭のテント下で泡遊びを楽しんでいたＡ児は、昨日の続きで石けんをすりおろし器で削って水に入れ、泡立て器で数回混ぜてはペットボトルに入れることなど、黙々と繰り返していた。遊んでいる途中、泡立った石けん水が半分ほど入ったボウルへじょうごを逆さにして入れてみたところ、先から泡が勢いよく出てきたことに気付いた。Ａ児は、ほとんど言葉を発することなくボウルの中でじょうごを持ち上げたり、沈めたりして繰り返し泡を出そうとしていたが、徐々にじょうごから泡が出なくなった。Ａ児はじょうごの先を気にして指を突っ込んだり、泡立て器やカップなどのいろいろな道具を使ったりしながら、もう一度泡を出そうとした。

⑵　Ａ児の姿から楽しんでいることを考える（Ａ児の遊び全体から分析）

出た意見を要約すると・・・

○自分なりに繰り返し試すこと。素材の特徴に気付いたり驚いたりしながら試すこと。
○泡の動きを見たり作ったりすること。泡が出てきた時の嬉しさや偶然起きた現象が楽しい。
○もっと泡を作れるかもしれないと考えて遊ぶこと。
○自分の発見（泡が出るか）を確かめたい。
○試す中で上手くいった手順を繰り返し、１回だけでなく、２回、３回同じことができると「これでうまくいく」という自信につながった。繰り返しやってみることがさらに楽しくなっている。

共通した捉えは・・・

○いろいろな道具や自分なりの考え、やり方で試している。
○様々な道具を使い、自分の発見や自分なりに試してみてできたことを、教師に見てもらいたい。

⑶　Ａ児が育っているであろうと思われる部分を５領域と10の姿を通して確認する（抜粋）

※コロナ禍のため会は開催せず、書面で集約したものを共有した。

≪楽しんでいること≫
・いろいろな道具や自分なりの考え、やり方で試している捉えは共通している。しかし、何を楽しんでいるかの捉えは…
　○素材の特徴に気付いたり驚いたりしながら試すこと
　○じょうごの先から泡を出すこと
　○自分なりに試すこと
　○何度もやってみて（じょうごの先から）出てきた時の嬉しさ
　○繰り返し試すこと
　○泡の動きを見たり作ったりすること

・自分の発見や自分なりに試してみてできたことを保育者に見てももらいたい。
以上が共通している。
～その他～
・試したり、偶然起きた現象が楽しい。
・自分の発見（泡が出る）を確かめたい。
・もっと泡を作れるかもしれないと考えて遊ぶこと
・なぜ泡がでてきたか疑問にもち、泡、泡水を増量してもっと多くの泡作りを考えたのでは
・試す中で上手くいったことが一回だけでなく、二回三回同じことができると「これでうまくいく」という自信につながってきて、繰り返しやってみることがさらに楽しくなっている。

健康：ねらい（1）（2）
　　内容（1）（3）（4）

人間関係：ねらい（1）（2）
　　内容　（1）（2）（3）
　　（4）（7）（12）

環境：ねらい（1）（2）（3）
　　内容　（1）（2）（4）
　　（8）（9）

言葉：ねらい　（1）（2）
　　内容　　（1）（2）（8）

健康な心と体
・充実感をもって自分のやりたいことに向かう。

自立心
・身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ。
・自分の力で行うために考えたり工夫したりする。
・自分の力で行うために考えたり工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わう。

自然との関わり・生命尊重
・自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化を感じ取り、好奇心や探求心をもって考え言葉などで表しながら身近な事象への関心が高まる。

豊かな感性と表現
・心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現する。

思考力の芽生え
・身近な事象に積極的に関わる。
・仕組み等を感じ取ったり、気付いたり、考えたり、予想したりする。
・身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組み等を感じ取ったり、気付いたり、考えたり、予想したり工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。
・身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組み等を感じ取ったり、気付いたり、考えたり、予想したり工夫したりする。

⑷　A児についての理解を深めるために

A児の姿について様々な捉えが出され10の姿と５領域を通してA児の姿を捉えようとしたが、書面上での意見の集約となってしまったため、思うように幼児理解を深めることができなかった。切り口を変えながらA児の姿について検討することで、幼児理解を深めていこうと考えた。

～A児ってどんな子？～

まずは“A児ってどんな子だろう”と研究員で共有するために、教師のA児に対する思いも聞きながら“A児”について探っていった。

教師の思い

普段から製作などでじっくりと取り組むA児の姿を大切にしたいと思っており、「なんで」「どうして」という思いに寄り添えるような関わりや、遊びの過程をA児が十分楽しめるように見守ったり、支えたりすることを心掛けている。この場面では、泡が上手く出たり、出なかったりした時にA児の姿を見守りながら、やりたいことを存分に楽しめるよう適切に応じていきたいと思った。また、A児なりの発見や気付きを教師に知らせたい姿も見られることから、丁寧にA児の気持ちに応えていくことも大切にしていきたいと考えていた。

【研究員で共有したA児について】
- （普段はよく喋るが）製作などの遊びになると、言葉はほとんど発さず集中して遊ぶ。
- 教師に自分のしたことを見てもらいたい。

～動画からの読み取り～

A児らしさが表れていると思われた場面（１分40秒程度）を切り取り、焦点を絞って事例を作成し、A児が『経験していること』を考えた。

☆A児がじょうごを逆さにして遊び始めた場面

事　　例	協　議　内　容
A児は、ボウルの中の石けん水をカップへ汲み、じょうごの先へ注ぎ直すが、泡は出なかった。注ぎ終わるとA児はじょうごを両手でグッとボウルの底へ押し込んだが、変化はなかった。①A児は、ボウルの周りを見て、手にしたお玉を一度置くが取り直し、空のペットボトルにボウルの石けん水をすくって入れた。①次はカップを手に取り、２回すくって注ぐと、石けん水はペットボトルの半分ほどまで入った。A児は横で座って見ている教師の方を向いて、②５回ペットボトルを振り泡立てた。 A児の様子を見た教師は、ペットボトルを横からのぞき込むようにしながら「このお水をペットボトルに入れて振ってみゆうがやね。どうなるかな」と話しかけたが、A児は返事することなく、自分の持っていたペットボトルをじっと見ていた。そして、泡	**①A児は道具を選んで使っていたのか。** 周囲の様子を見渡したり、手に取ったお玉を一度は置くものの取り直したりと、A児はじょうごやお玉、カップなど必要に応じて使う道具を選んでいると思われる。 **②なぜA児はペットボトルを、５回振ったのか。** 昨日もそのような遊びをしていたことから、ペットボトルを振ると泡立つことや泡が増えるということを知っていたと思われる。繰り返し遊ぶことで、泡が出る時と出ない時があることなどの違いに気付き、泡が出てこなくなったのは、泡が少なくなったからだとA児なりに考えたのではないか。そして“泡立てた石けん水を入れると、泡が出る”と自分なりに考え、経験したことを試しながら、偶然発見した勢いよく出る泡を再現しようとしていたのではないだろうか。

立てた石けん水をじょうごの先から勢いよく注いだものの、泡は出てこなかった。

次に、じょうごを一度持ち上げてボウルに押し込むと、少し泡が出てきた。教師が「泡が出てきたね」と話しかけたが、A児は黙々と、更にじょうごをぐっと押し付けたり、横にずらしたりした。教師は側で色水遊びをしていた子どもの所へ行った。A児はその後、じょうごをボウルから出し、③石けん水をカップで3杯すくって別のボウルに移した。そして、石けん水が減ったボウルにじょうごを再び入れると、勢いよくじょうごの先から泡が出てきた。

④A児は、じょうごを押さえたまま無言で振り返り、すぐに後ろにいた教師の方を見たが、色水遊びをしていた子どもと関わっていた教師は、A児の様子に気付いていなかった。少しして、教師がA児の隣に行き、「どう？泡出てきている？」と声をかけた。⑤A児は教師に気付き、急いでボウルの中の石けん水をカップで3杯汲んで、側のボウルに移した。そして、石けん水を減らしたボウルにじょうごを沈めると、またじょうごの先から泡が勢いよく出てきた。教師がその様子を見て、「おもしろい発見があったね」と言うと、A児は照れた様子で下を向いた。

③⑤A児は自分なりの目安をもっているか。

ボウルに石けん水がいっぱいになったらカップ3杯減らす姿から、量を見ながらこれまでに成功したやり方（カップ3杯分減らす）で加減をしたり、水面からじょうごの先が出ているか出ていないかなどを目安にしたり、自分なりに考えて試したりしていると思われる。石けん水の量に気付き、水を減らす姿から作りたい泡のイメージがあったのではないだろうか。

④A児はなぜ教師を見たのか。

じょうごを押さえたまま振り返って教師を目で探す姿から、自分なりに考えていろいろな方法で試しながら勢いよく泡が出たことを、教師に見てもらいたい、泡が出せた自分を認めてもらいたい気持ちをもっていると考えられる。

⑤自分が発見したことを教師に認めてもらい、喜んだのではないだろうか。

⑸　A児が経験していたことをもとに、明日からの保育について考える

～この日A児が経験していたことは～

・身近な素材や道具に自らかかわり、目的をもって繰り返したり試したりすること。

・自分の発見を教師に知らせたり、認めてもらったりすることの喜びを味わう。

～明日からの保育に取り入れたい環境構成と教師の援助～

これまでの研究を踏まえ、明日のＡ児に対する環境構成と教師の援助として考えられることと、つながると思われる10の姿を挙げてみる。

＜環境構成＞

Ａ児の捉え	必要と思われる環境構成	つながると思われる10の姿
石けん水や泡の量の違いに気付き、泡を出すためにどの道具を使うとよいのか試行錯誤している。	減らした水の量が分かるメモリ付きの道具や大中小など大きさの異なるボウル、水の量が見える透明のペットボトルなど道具の種類を工夫する。	思考力の芽生え 自然との関わり 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
教師に見てもらいたい、認めてほしい思いが強い。	友達の存在を感じたり、子ども自ら周囲の状況に気付いたりできるよう、机の配置を整える。	協同性 言葉による伝え合い

＜教師の援助＞

Ａ児の捉え	必要と思われる環境構成	つながると思われる10の姿
泡が出せたことを教師に見てほしい、教師と一緒に見たい思いが強い。	泡作りやじょうごの先から泡を出すことなどＡ児の興味や関心に添って一緒に楽しみ、気付きや発見、嬉しさに共感する。教師は「すごいね」「できたね」など、抽象的な言葉を掛けてしまったが、していることの価値や発見などにＡ児自身が気付き、自信へつなげていくために、泡を出すことができた時、夢中になって取り組んでいる時、やり遂げた時など、それぞれの場面でのＡ児の思いや行動に添った具体的な言葉を掛ける。	健康な心と体 自立心 言葉による伝え合い 自然との関わり
納得いくまで根気よく取り組むよさがある。	Ａ児のしていることの楽しさや面白さを、Ａ児自身が実感できるようフィードバックしたり、周囲の友達に伝え友達とつながるきっかけを作ったりしていく。	言葉による伝え合い 豊かな感性と表現
Ａ児は、自分の思いを言葉や表情で表現することが苦手である。	経験したことや考えたことを自分なりに表現することにつながるよう、認めの言葉だけでなく「おもしろいね。どうやったの？」とＡ児から言葉を引き出すような投げかけを意識する。伝え方や表現に困っているようであれば、教師が選択肢のある問いかけをしたり「○○だったんだね」などとＡ児の思いを言葉にすることでモデルを示したりしていく。	豊かな感性と表現 言葉による伝え合い

5．まとめと今後の課題

○今年度は、テーマにある“幼児理解”を深めていくための工夫として、昨年度の学びの一つから、動画、写真などを使って事例を作成し、協議を行うこととした。公開保育では、担任がそばにいなかった時の子どもの姿を知ったり、経験や楽しんでいることを客観的に見たりすることができ、多面的な捉えへとつながった。また、動画を撮影したことで、コロナ禍のため当日参加できなかった研究員もＡ児の姿が共有できた。今回行った動画の活用は研究員内だけであったが、可視化し何度も繰り返し見ることで、気付きにくいＡ児の姿が確認でき、保育の共有や細かな視点での協議をする際には有効な手法であったと思われる。今後、更に工夫するならば、公開保育当日の保育を見る時の視点に合わせ、どこに注目して撮影するか（子どもの表情、環境構成、教師の援助など）の工夫があれば、より研究協議の内容も深まるのではないかと思われる。

○Ａ児に焦点をあてた協議では、幼児理解を基盤に視点や協議内容等の切り口を変えながら、Ａ児について話し合いを重ねてきた。同じ場面について、事実の共有やそれぞれの捉え方を確認し合いながら、動画を繰り返し視聴し、Ａ児に対する理解を深めようと協議したことにより、より姿の捉えが具体的になり、明日の保育につながる環境構成と教師の援助が明確になったと思われる。この協議を通して、多様な気付きや発見が幼児理解を豊かにすることを実感し、学びとなった。しかし、コロナ禍で研究員が集まれず、研究員から個々に意見を出してもらい、集約する方法をとってみたが、５領域や10の姿についての協議がしきれず最後まで十分に活用できなかった。今後、研究員が集まれない状況になった場合の研究の進め方や時短も含め、保育を見る時の視点の工夫や動画の活用など、幼児理解に基づいた協議が深まり、互いに学び合える効果的な研究方法を探っていくことで、更に幼児が発達に必要な経験をするための環境構成や教師の援助について深めていきたい。

中部支部

研究主題　「５領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

１．研究にあたって

昨年度は各園の研究を通して、事実に基づいた幼児理解をするために、５領域の内容について学びを深めることの大切さを確認した。子どもの実態を捉えた上で、各年齢のそれぞれの時期に経験してほしいことは何なのかを確かめながら、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下「10の姿」とする）につながる援助と環境構成について、より具体的に考えていくことが重要であると学んだ。

幼児期の教育は環境を通して行うことが基本となるからこそ、子どもの実態を十分に捉え、子どもの経験や実態に即した環境構成をすることで子どもの主体性につながってくる。そこで本年度は、環境構成に視点を置き、子どもの姿を５領域の内容と10の姿に結び付け、経験していることを捉え、その姿につながった物的環境と人的環境について掘り下げていくことで、研究主題に迫っていきたい。

２．研究の進め方

○研究保育の会場園である、高知市立かがみ幼稚園５歳児の保育を通して研究を進めていく。

○研究保育について、当日撮影したビデオの動画（全体を撮った映像、教師の関わりに焦点を当てた映像）から事例を作成し、協議を行う。子どもの経験していることを５領域の内容や10の姿に照らし合わせながら探っていく。

○事例１、２では子どもが目的に向かって遊ぶ姿につながった環境構成について出し合い、物的環境・人的環境と分けて考察し、それぞれの環境がどのように関連していたか捉えていく。

○事例３では対象児に着目した事例から内面を読み取り、必要だと考える教師の援助や環境構成について考えていく。

○各園で教師の援助や環境構成について検討することで支部全体の学びとなるようにしていく。

３．研究経過

実施日	会　　場	内　　容
４月８日	高知市鏡公民館	支部総会（役員改選、研究テーマ、年間計画などについて）
６月４日	高知市鏡公民館	第１回研究員会（研究の進め方、公開保育役割、夏季研修の内容について）
６月21日	いの町立伊野公民館	第２回研究員会（「研究にあたって」の検討、夏季研修について）
７月８日	高知市立かがみ幼稚園 高知市鏡公民館	中部支部研究会（研究保育・研究協議）かがみ幼稚園５歳児 講師　高知県幼保支援アドバイザー　岡田　悦子先生 第３回研究員会（研究保育事例の検討）
７月12日	いの町立伊野公民館	第４回研究員会（研究保育事例の作成、検討、夏季研修について）

7月27日	いの町立伊野公民館	中部支部夏季研修会（事例の考察、研究協議、教材研究など） 第5回研究員会（研究保育事例の検討、考察について）
12月24日	高知大学教育学部附属幼稚園	第1回研究推進委員会（「幼児教育のあゆみ」のまとめ方について）
1月6日	高知市立かがみ幼稚園	第6回研究員会（推進委員会の報告、資料作成について考察）
3月7日	いの町立伊野幼稚園	支部総会（事業報告及び本年度まとめ、次年度に向けて）
3月9日	高知大学教育学部附属幼稚園	第2回研究推進委員会（「幼児教育のあゆみ」のまとめについて）

4．研究内容

研究保育　7月8日（木）　高知市立かがみ幼稚園

5歳児　すみれ組　10名

すみれ組のねらい（○）内容（●）　（抜粋）

○友達と関わりながら、自分なりに試したり、工夫したりして遊ぶことを楽しむ。

○互いの思いや考えを伝え合いながら、遊びや生活を進めていこうとする。

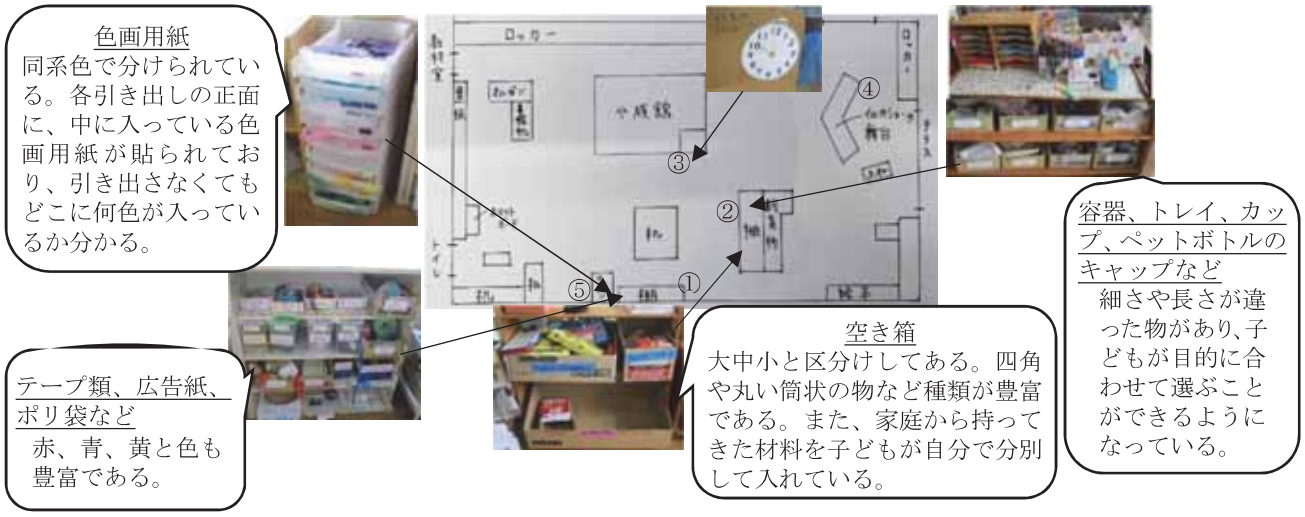
●水族館や影絵劇、船作りに必要なものやイメージしたものをいろいろな材料を使って、工夫して作る。

●年下の友達を水族館や影絵劇に誘い、案内をしたり、イルカショーや劇のお話を見せたりする。

●気付いたことや発見したことを知らせたり、自分の思いや考え方を友達や教師に伝えたり、友達の話を聞こうとする。

〈環境構成〉

子どもが製作活動などで触れたことのある材料を中心に用意し、これまでの経験を活かしながら材料を選ぶことができるようにしている。また、思いの実現に向けて、試したり、工夫したりしながら作りあげていくことができるように必要と予想される色の種類や様々な大きさや形の材料などを用意している。



【事例１】自分なりのイメージをもって、工夫したり試したりしている姿から

〈教師の願い〉

昨年度の年長児の遊びを再現して作ってみようとする姿や、友達の姿や生活の中で経験した様々な刺激を遊びに取り入れる姿もある。自分なりの発想やイメージを教師や友達に伝えながら作りたいものに合った材料を選んで作ろうとする姿があるが、作りたい思いは芽生えているものの、どのように作ったらいいのか困っている姿が見られることもある。その子なりのイメージや思いを大事に、それぞれの豊かな発想やアイデアを活かしながら、自分なりに試したり工夫したりして作ることや作りたいものが実現した喜びや作った物で遊ぶ楽しさを味わえるようにしたい。

～空き箱での犬作りの場面より～

Ａ児は、Ｂ児が空き箱で作った犬を抱きかかえているのを見て、教師に「ぼくもＢみたいに作りたい」と言い、製作コーナーで犬を作り始めた。

犬の足を作ろうと、横に向けた牛乳パックの下の面にヤクルト容器を１本ずつ付けて、ガムテープを手でちぎって巻き付けた。作り終えると床に置き「わんわん、わんわん」と首に付けていたひもを引っ張って散歩させるように歩くが倒れてしまう。何回立て直しても横に倒れてしまう犬を抱きかかえ、４本足のところを見ていた。

そこに教師が通りかかり「あ、犬ができたね」とＡ児に言うと「全然、めっちゃこれ落ちていく」と言った。「何で？」と教師が聞くとＡ児は４本足の１つを指差し「これが低いがよ」と言った。教師は「あーそれが低いがか。じゃあ同じのに変えてみる？同じのもうない？」と言うとＡ児は「ありませーん」と言う。教師は「じゃあちょっと待って」と教材室に入り、容器が入った袋を持って来た。「この中にないろうか、同じ高さじゃないといかんもんね」と教師が袋をＡ児に見せると「ここにある」と袋の中を指差した。教師は「あった？ちょっと探してみてくれる？」と言った。

教師から袋を受け取るとＡ児は机に戻り、袋の中から容器を１つ選んで取り出した。そしてガムテープをハサミで切って４本足のうち高さの違う１本を取り外し、選んだ容器をガムテープで張り付けた。付け終わると床に置き、繰り返し歩いて「ははっ」と犬を見ながら笑った。

【支部での協議より】

〈経験していることと5領域との関係〉

〈子どもが目的に向かって遊ぶ姿につながった環境構成〉

（　）は各領域の内容

自分なりのイメージをもって、工夫したり試したりしている姿

- 友達が作った犬を自分も作りたくて同じように作り始めた。
- 牛乳パックの下の面にヤクルト容器を１本ずつ付けて、ガムテープを手でちぎって巻き付けた。
- 何回立て直して歩かせても横に倒れてしまう犬の足を見て「これが低い」と言った。
- 教師の問い掛けに答え、必要な材料を選ぶと、また自分で作り始めた。

環境　(2)

- 友達の存在によって、子どもの環境との多様な関わりが促され、そこから遊びが生まれている。
- これまでいろいろな材料を使って製作する経験を積み重ねているからこそ、適した性質の材料を選び、子どもなりに使いこなして遊んでいる。

環境　(8)(9)

- 自分の作った物と十分に関わることで、どうすれば倒れないようになるのか自分なりに見たり、触ったり、比べたりして高さの違いに気付いている。
- 試したり、考えたりしながら自分の実現したいものに向かって何度も考えたり、作ったり、必要な材料や素材を選んだりしている。

物的環境

豊富で細かく分類された材料①

- 選択する幅が広がり、やってみたい気持ちにつながっている。
- 作りたいもののイメージを実現できる。
- いろいろな材料を使って試したり工夫したりすることが繰り返しできる。

友達と互いの姿が見合えるような保育室②

- 友達の作った物に興味をもったり、同じように作ってみようと工夫したりする姿につながっている。

人的環境

友達の存在

- 友達の遊んでいる姿を見て作ってみようとするＡ児の姿につながっている。

教師の言葉掛け

- すぐに答えを出さず「何で？」と聞いた言葉掛けがＡ児の考えを引き出すきっかけにつながっている。
- 必要な容器だけを袋から取り出して渡すのではなく、Ａ児が選べるようにしたことで、Ａ児は思いが実現したことを喜んでいる。

今後取り入れたらよい環境構成（10の姿とつなげて考える）

(6)　思考力の芽生え

・材料や素材を使いこなして遊んでいる姿があるので、形や特徴だけで作りあげるのではなく、さらに性質などに気付き、本物らしく作るようなこだわりをもって遊ぶことができるように、新しい材料や素材を用意することも必要となってくるのではないか。

(8)　数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

・材料や素材の名称を示し、子どもが目にする機会を多くつくっていくことで、日常生活の中でさらに文字への関心が深まるのではないか。例えば色画用紙にそれぞれの色の名前を書いて環境として出すことで色の名前を知る機会にもつながるのではないか。

〈事例１を通しての学び〉

○考えて選択する状況があることと、子どもと一緒に悩んで考えたりする教師の援助があることで、子どもが自分の力を発揮できる環境となっていることが分かった。３・４歳児での経験を前担任から聞き、子どもの手に適う物、扱うことが出来る物を把握した上で、環境構成をしていたことが材料の豊富さにつながっていると分かり、環境構成をする際の意識の大切さも学ぶことができた。

○協議の中でＡ児の伝え方にも着目した。幼児なりの表現を受け止めることも大切だが、相手に分かるような表現を知らせていくことや教師がモデルとなって伝えていくことも、今後Ａ児には必要になってくるのではないかと話し合うことができた。

【事例２】自分達で遊びを進めようとしている姿から

～前日までの子どもの姿～

空き箱や色画用紙で作った魚を大型ダンボールの中に付けて水族館を作っていた。水族館には、ラミネートされた時計が貼られており“水族館が始まる時間”“イルカショーが始まる時間”と書かれていた。保育室の黒板に教師が貼っていた物を子どもが自分たちで遊びに活用し始めた。

イルカショーは水族館で見たことがあったＣ児の発言をきっかけに遊びが始まった。Ｃ児は友達と一緒に３・４歳児を呼びに行き、Ｄ児やＥ児とイルカショーを披露した。

〈教師の願い〉

自分から友達を誘ったり、途中から参加する友達と一緒に遊びを進めていったりする姿も見られ始めている。その姿を大事にし、友達と思いや考えを伝え合いながら、遊びを進めていく楽しさを味わっていけるようにしたい。また、自分達で考えて作ったイルカショーを、年下の友達に見てもらうことで、友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じ、満足感や充実感を味わってもらいたい。

～イルカショーの準備の場面より～

水族館を開く時間になり、３・４歳児が来るとＣ児、Ｄ児、Ｅ児はそれぞれに水族館を案内したり、お客さんに自分たちで作っていた水着を着るよう声を掛けたりしていた。しばらくしてＣ児は時計を気にし始めた。そして部屋の時計を見た後、辺りを見回しＤ児の名前を呼び掛けながらＤ児のところに行き、イルカショーの時間を聞いた。

Ｄ児は「イルカショーの時間あそこで」と、イルカショーの時間を書いている所を指差した。Ｃ児はＤ児が指差した場所に行き、イルカショーの時間と部屋の時計を見比べた。Ｃ児は「ねえねえＤ、分からんがやけど」と、もう一度Ｄ児を呼んだためＤ児はＣ児と一緒に時計を見た。Ｃ児は「10でしょ？」「こっちは、何をさしてるの？」と聞いた。Ｄ児は、部屋の時計と見比べた後「まだまだ、もうちょっとやき」と言って、水族館に戻りかけたが、振り返ってＣ児に「イルカショーの準備しちょったら？」と言った。Ｃ児は「あ、する！」とイルカショーに使うペープサートの舞台を出してきた。Ｄ児は水族館の案内をやめ、イルカショーができる場所をつくるため、近くにあった船や材料を寄せて舞台を置いた。

【支部での協議より】

〈経験していることと5領域との関係〉
（　）は各領域の内容

〈子どもが目的に向かって遊ぶ姿につながった環境構成〉

自分たちで遊びを進めようとしている姿

C児
自分達で進めようと友達に分からないことを聞いた。

言葉 (3)
・分からないことや知りたいことを友達に尋ねたことで、時間を分かって進めることができた。イルカショーをしたいという思いを実現するために、自分の分からないことを聞く必要性を感じて、尋ねている。

D児
イルカショーの時計と部屋の時計を見比べて時間を確認するなど、見通しをもって準備を始めた。

健康 (8)
・友達と一緒に遊びを進めることで、園生活での楽しさや充実感を味わいながら自立的に進んで準備している。
・イルカショーを始めるまでの時間の流れや場の使い方などを予測して行動しようとしている。

C児・D児
イルカショーをするのに必要な場を考え、友達と協力して用意した。

人間関係 (8)
・イルカショーをするという同じ目的をもって一緒に必要な場を用意している。
・友達と目的を共有して遊びを進めることで生き生きと自己発揮するような関係性を築いている。

物的環境
ラミネートされた時計③
・水族館の始まる時間を友達と共有できる物になっており、自分達で決める経験にもつながっている。
ペープサートの舞台④
・動かしやすい大きさであり、自分達で場をつくりやすい物になっている。
片付ける場所が決まっている⑤
・片付ける場所を子どもと一緒に考えて決めている。自分達で環境をつくっていることで必要な時に必要な物を用意でき、遊びを自分たちで始めることにつながっている。

人的環境
教師の援助
・子どもの思いを実現できるようにこれまでの教師と作ったり一緒に考えたりしてきた経験の積み重ねによって、自分達で進めようとする姿につながっている。
友達との関係性
・D児の存在によってC児は安心して遊びを進めることができるのではないか。思いを出せる相手の存在や関係性がより自分達で遊びを進める楽しさにつながっている。

今後取り入れたらよい環境構成（10の姿とつなげて考える）

(2)　自立心

・一人のアイデアや考えが周りから認められてやりたいことが実現し、達成感や満足感を味わう経験となっている。引き続き子どもの主体的に関わる姿や難しいことに挑戦したり、うまくいかなかったときも諦めない気持ちをもったりして、やり遂げた経験を積み重ねられるようにしていく中で、教師が一人一人の良さを認め、例えば降園活動などを通して伝え、友達にも仲間として認められ自信へとつなげていくことが大切ではないか。

(3)　協同性

・子どもだけで遊びを進めていこうとする場面で、友達と目的に向かって取り組んだことで周りの友達が楽しんでくれる嬉しさを味わうことができるような関わりも大事になってくるのではないか。また、異年齢での関わりも見られたので職員間で連携して異年齢児の関わる機会を保障していく。

〈事例２を通しての学び〉

○友達同士で声を掛け合って遊びを進めていこうとする姿が見られ、自分の思いを出すことができる存在の大切さを学ぶことができた。友達や教師など園生活の中で思いを出す相手がいることで自分の思いに向かって進めていこうとすることや友達と一緒に遊びを進める楽しさを味わうことができるのだと分かった。

○教師が子どもの姿をしっかりと捉えていることで、遊びを見守るという援助につながっている。教師が意図して友達にも広げていくことでさらに友達関係を深めることにつながったり、友達と遊びを進めていったりする楽しさにつながるのではないかと話し合うことができた。

【事例３】友達との関わりの場面より

〈Ｆ児の日頃の姿と教師の願い〉

Ｆ児は教師にはよく話をし、休み中の出来事や友達の様子など状況を分かりやすく伝える姿がある。また、周りの様子によく気が付き、年下の友達が困っているときには相手の思いを汲みながら声を掛けるなど、優しい面が見られる。クラスの友達との関わりでは、相手によって強い口調で話したり、友達の話を聞かなかったりする姿も見られるが、自分が困っているときなどには、素直に思いを伝えられずに泣いたり、黙ったままその場で固まっていたりする姿もある。

遊びの中では、友達のしている遊びに興味をもち、関わっていく姿がある。少しすると、遊びの場から離れて、折り紙を折ったり、色水遊びをしたりと、１人で遊ぶことが多い。そのため、Ｆ児の姿から興味関心や困り感を捉えることを難しく感じている。友達と思いや考えを出し合いながら一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしいと思っているが、Ｆ児にとって本当に必要な援助や環境構成を探っているところである。

～Ｆ児の姿を追って～

Ｆ児は、Ｄ児がイルカショーに使うペープサートを置いてあるワゴンへ取りに行く様子を見ながらイルカショーの近くを歩いていた。Ｃ児、Ｅ児とイルカショーの練習をするか話すと、Ｆ児は「練習いらんろ」と答え、その後、Ｄ児が持って来ていたイルカショーに使うペープサートのボール２つのうちの１つをワゴンに戻した。

Ｆ児は以前作っていた鳥のペープサートを自分のロッカーに取りに行った。Ｃ児に何かを言いながら自分が持って来た鳥のペープサートを見せたが、Ｃ児は首を横に振った。Ｆ児は１歩後ろに下がりながら、もう一度Ｃ児に話をしたが、Ｃ児が首を横に振って受け入れてもらえない様子だった。Ｆ児はＣ児のいる場からイルカショーのところに行き、舞台の後ろに鳥のペープサートを置いた。

Ｃ児・Ｄ児・Ｅ児の３人がイルカショーを始めると、Ｆ児は舞台の後ろに座り、ガムテープをちぎりながら時々イルカショーを見ていた。イルカの役になっているＣ児が「今度は何して遊ぶ？」と言うと、後ろにいたＦ児はボールのペープサートをさっと握った。Ｅ児がボールを取ろうと振り返ると、Ｆ児はボールのペープサートを胸のあたりに引き寄せた。Ｅ児が手を差し出すとすぐに渡した。Ｄ児は自分が座っているところをきょろきょろと見回し、何か尋ねた。するとＥ児が「Ｆがどっか持って行った」と答えた。Ｄ児が振り返って「どこに置いたが？」と聞くと、Ｆ児が「あそこ」とワゴンの方を指差した。Ｄ児は嫌そうな顔をしながら「何で持って行くが」と言った後、自分でもう１つのボールを取りに行った。Ｆ児は黙ったまま３人の様子を見ていた。

【Ｆ児の姿より】

・自分もやりたい、遊びたい気持ちがあるが、友達に対してイルカショーを一緒にしたいという気持ちを言葉で表現できないのではないかと考える。教師が友達とつなぐ関わりが必要になってくるのではないだろうか。
・これまでＦ児は友達の気持ちを聞いたり受け入れたりする姿が少なかったので、友達との信頼関係が築けていないのではないか。

周りの子ども達が友達との遊びを楽しめているからこそ、教師がＦ児の行動を認め、友達とつなげる関わりが必要なのではないか。

今後取り入れたらよい環境構成（10の姿とつなげて考える）

⑵　自立心　　⑶　協同性

・友達と折り合いを付けることができて楽しかったと思えるような経験を積み重ねていけるようにする。Ｆ児の得意なことや素敵なところをクラス全体に伝える場をつくり、友達からのイメージを変えていくとともに、Ｆ児の自信になるようにする。

⑼　言葉による伝え合い　　⑽　豊かな感性と表現

・教師との関わりの中で、Ｆ児が安心して多くの思いを伝えることができるようにしていくとともに、相手への伝え方を知らせていくようにする。また、友達の言葉にも耳を傾けることができるように、友達の言葉を教師が代弁したり、場をつなぐようにしたりしていくようにする。

〈事例３を通しての学び〉

○Ｆ児の幼児理解をもとに取り巻く環境について考えていった。クラス全体で捉えると友達と思いを出し合って遊びを進めている子どもがいるが、個人に着目して捉えるとまだ友達との関わりに教師の援助が必要な子どももいることが分かった。子どもが目的をもって遊ぶ楽しさを感じるためには物的環境との関わりだけでなく、友達との関係性など人的環境の影響も大きいことが分かった。自分の力を発揮できるように互いを認め合えるような援助や言葉をつなぐ援助もこの場面において必要だったと確認することができた。

５．まとめと今後の課題

○本年度は、環境構成に視点を置いて研究を進めていき、物的環境・人的環境と分けて考察した。特に経験の少ない教師にとっては一つ一つの環境を取り出して目を向けたことにより、子どもの姿にどのように影響しているのか捉えやすく、保育を具体的に振り返ることができた。より深く明日の保育や子どもの育ち、経験していることについて考え、保育の質の向上につなげていくことができた。

○考察していく中で、環境構成として明確に表現できるものばかりではなく、雰囲気やこれまでの遊びの経緯などが関連し合って今の子どもの姿につながっていると学べた。教師が子どもの実態をしっかりと捉えて、日々の保育で教師の意図と子どもの興味関心を絡み合わせながら環境の再構成をし、子どもの充実感や満足感につなげていくことが必要だと感じた。

○研究の進め方については、経験していることを読み取るために子どもが繰り返し楽しんでいる姿を捉えることが難しかった。また、事例の作成においても実際の場面を見ることができていない職員にも状況が伝わるような表現も難しかったが、分かりやすく端的に伝える工夫も学ぶことができた。

○子どもが目的に向かって遊ぶ姿につながる環境との関わり方として、様々な経験の積み重ねが大切だと分かった。子どもの実態をしっかりと捉えながら発達を見通した計画をたて、環境を構成できるようにしていきたい。

高知支部

研究主題　「５領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

１．研究にあたって

昨年度の研究では、５歳児の好きな遊びの時間に見られた幼児の姿を、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下「10の姿」という）から捉え直し、週日案に設定されていたねらいや内容等の検討を行った。このことを通して、幼児の姿が10の姿のどの地点にいるのかがわかり、具体的な環境構成や援助のあり方を見直すことにつながった。また、５領域から見直し再編成した教育課程を基に月別指導計画や週日案を作成していたが、10の姿を活用した保育の見つめ直しの必要性についても学ぶことができた。

今年度は、製作や運動など、学級または学年ごとに教育活動として位置づけ毎日行っている集団活動の時間を取り上げる。集団活動は、教師が設定した活動に、話を聞いて理解して取り組み、自分の力を高めてほしいと願って設定している活動である。具体的には、新しい教材や用具、遊び方を知り、経験の幅を広げていく活動、友達との遊び方を身に付けていく活動、友達と相談し、つくり上げていく活動などを行っている。ややもすると幼児が遊びを選び取り組んでいる好きな遊びの時間を研究として取り上げ、幼児の学びについて検討することが多いが、教育活動として行っている集団活動も研究することで、今まで以上に研究主題に掲げる保育のあり方について検討できるのではないかと考えた。

そのため、５歳児の集団活動を中心に子どもの姿や学びについて10の姿を通して捉え、研究主題である「５領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」に迫りたい。

２．研究の進め方

研究を以下の流れで進めていくこととする。

① 集団活動の様子をビデオカメラで撮影する。導入の場面は、集団活動で重要となるため、教師の言動と子どもの姿の両方が記録できるよう、２台のビデオカメラで録画する。

② 映像を視聴しながら、幼児の言葉、動作、手指の動き、表情、視線などといった事実を子どもの姿として書き留める。

③ ②を教師の願い、幼児の姿、学びの３項目でまとめる。

④ ③の資料を基に幼児の学びが10の姿のどの部分に該当するか協議し、まとめる。

３．研究経過

実施日	会　　場	会名および内容
４月１日	高知大学教育学部附属幼稚園	高知支部推進委員を決定
４月13日	高知大学教育学部附属幼稚園	高知支部研究主題の共通理解・研究計画の作成

5月22日	高知大学教育学部附属幼稚園	第1回研究推進委員会 研究の進め方について検討（Zoom）
5月25日	高知大学教育学部附属幼稚園	高知支部研究保育・研究協議を実施
12月15日	高知大学教育学部附属幼稚園	高知支部事例検討会（第1回）を実施
12月24日	高知大学教育学部附属幼稚園	第2回研究推進委員会（Zoom） 「幼児教育のあゆみ」のまとめ方について検討
1月25日	高知大学教育学部附属幼稚園	高知支部事例検討会（第2回）を実施
3月1日	高知大学教育学部附属幼稚園	高知支部事例検討会（第3回）を実施
3月9日	高知大学教育学部附属幼稚園	第3回研究推進委員会（Zoom） 「幼児教育のあゆみ」のまとめについて検討

4．研究内容

⑴　研究事例までの子どもの姿と学び

○動物園ごっこ（好きな遊び）　5月第1週

5歳児はと組（2、3年保育　17名）では、男女2名ずつぐらいで大型積み木を使って動物園ごっこが始まり、自分達でなりたい動物を決め、大型積み木で囲い、その中や上を四つ這いになって行き交い、動物になりきることを楽しんでいた。また、飼育員役の子は、動物に合わせて色板積み木を器に盛ると、動物ごとに区画された積み木の中に置いて飼育員をイメージして遊ぶことを楽しんでいた。

○「割りピンを使ったワニ作り（集団活動Ⅰ）」　5月14日（金）

年長ならではの物の仕組みに興味をもち、遊ぶ楽しさを味わってほしいと願い、割ピンや一穴パンチといった新しい教材や用具を取り上げ、それらの使い方を知り、経験の幅を広げていくこととした。

具体的には、割ピンで留めるとよい位置を黒丸で示した型紙と割ピン、一穴パンチを用意し、子ども達が楽しみにして聞いているピーターパンの紙芝居に登場するワニの口が上下に動く製作活動を行うことにした。

ねらい（○）・内容（■）一部抜粋

○集団活動で割ピンや一穴パンチを使ってワニ作りを楽しむ。

■色画用紙同士を1か所留めるワニ作りを行い、割ピンや一穴パンチの特性を知る。

※以下、下線と②～⑩の番号は、表の下に記載している「関連する10の姿」と対応させるためのものである。

教師の願い	幼児の姿	学　び
・仕掛けのある造形的な表現の面白さにつなげたい。	・作り方の説明を聞き、自分なりに作っている。 ・友達の様子を見ながら作っている。	・割ピンの使い方を知り、作ってみる。道具の使い方によっては失敗することを知る②⑥⑩。 ・作った物が動くか試してみる⑥⑩。

	・残った色画用紙で他の動物を作る。 ・残った色画用紙で他の動物を作るため、２枚重ねて一穴パンチで穴を開ける。穴が欠け、うまくいかない。	・達成感を味わう②。 ・他の動物もできないか考え、挑戦してみる⑥。 ・一穴パンチを色画用紙の奥まで差し込まないと穴が欠けてしまう⑩。

関連する10の姿

②自立心：しなければならないことを自覚し、諦めずにやり遂げることで達成感を味わう。

⑥思考力の芽生え：物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむ。

⑩豊かな感性と表現：素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現する喜びを味わい、意欲をもつ。

○「割りピンを使った動物作り（好きな遊び）」　５月第２週

その後の好きな遊びの中で、子ども達がイメージしているものを試行錯誤しながら形にしていく楽しさを味わってほしいと願い、要望のあったカメ、ゾウ、カバなどの型紙を用意した。また、製作コーナー付近に型紙や割ピン、一穴パンチを並べて置き、いつでも使えるようにした。

ねらい（○）・内容（■）一部抜粋

○気の合う友達と興味をもったことに積極的に取り組み、工夫して遊ぶ。

■自分の思いや考えを出し合いながら動物園や水族館ごっこに必要だと思うものを準備し、やってみる。

教師の願い	幼児の姿	学　　び
・割ピンを使った遊びを好きな遊びでも存分に楽しむことで、新しい素材を自分のものにしてほしい。 	・どの動物も作ってみる。 ・友達と段ボールや段ボールカッター、色画用紙などを使って動物園や水族館を作って、動かして遊ぶ。 ・遊ぶ中で、必要なえさや動物の居場所などを言葉でやりとりし、作る。 ・一穴パンチ後に出た丸い紙を容器にたくさん集めて、蓋をし、ストローを差し込んでおもちゃ（スノードームのようなもの）を作る。	・自分の力で作ることができる②。 ・作った動物を使って、友達と動物園にするために必要な物を相談する⑥⑨。 ・必要な物を友達と一緒に作る③④。 ・中の様子がよく見える入れ物を探したり、ストローを挿す位置を考えたりし、工夫して作ってみる⑥⑨。

関連する10の姿
②自立心：自分の力で行う。
③協同性：共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりする。
④道徳性・規範意識の芽生え：友達の気持ちに共感したり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、決まりをつくったり、守ったりする。
⑥思考力の芽生え：物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、工夫したりし、多様な関わりを楽しむ。
⑨言葉による伝え合い：考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりする。

⑵　研究事例

○割りピンを使った動物作り（集団活動Ⅱ）　5月25日（火）

オリジナルの動物を作って遊ぶ楽しさを皆に体験してほしい、割ピンで動きが変わる面白さを感じ取ってほしいと願い、以下のような集団活動を行った。

ねらい（○）・内容（■）

○前回の経験を生かして、ハサミや割ピンなどを使って、動物作りをし、自分が作った動物に動きが出ることを楽しむ。

■作りたい動物を選び、ハサミで切ったり、一穴パンチで穴を開けたりして作ってみようとする。

■水性マーカーで色を塗ったり、他の部位を加えたりし、オリジナルの動物を作ることを楽しむ。

■作った動物を動かしながら、自分が思ったことや考えたことを友達と言葉でやりとりしたりする楽しさを味わう。

〈導入〉

まず、１回目の集団活動で、色画用紙の余った部分を使って他の動物を作ろうとしたが、２枚重ねて穴を開けようとした際に、穴が欠けてしまい割ピンを挿すことができずに悔しい思いをした子どもの話から始めた。動物の輪郭を描いた色画用紙の黒い点を見せ、色画用紙で作った一穴パンチでパンチして見せた。そして、穴が開いたもの同士を重ね合わせて割ピンで留めるという方法を知らせた。

縦長や小さい色画用紙なども用意し、オリジナルの動物を作ることもできると知らせ、「動物作りを楽しみましょう」と言い、製作遊びを開始した。

教師の願い	幼児の姿	学　び
・ワニ作りをきっかけに、子ども達がもっと作ってみたい動物や恐竜の型紙を用意して、割ピンを使った造形の面白さを味わわせたい。	・イルカやオットセイ、キリン、ライオン、恐竜などの型紙の中から好きな物を選び、割ピンを使って動物作りを楽しんでいる。 ・いろいろな動物の型を次々と切ることを楽しんでいる。 ・自分の作りたい物を動かして楽しむ。 ・一穴パンチの使い方を思い出し、２枚同時に穴を開けようとする。	・割ピンの使い方に慣れて自分で動物作りを進めていく②④⑥。 ・作品に動きができる仕組みを知り、作品を使っていろいろな動きを表現して楽しむ⑨⑩。 ・出来上がった達成感を味わう②。

関連する10の姿
②自立心：自分の力で作り、できた物を動かして達成感を味わう。
④道徳性・規範意識の芽生え：ハサミを使う時のルールがわかり、安全な使い方を守る。
⑥思考力の芽生え：一穴パンチの仕組みを知り、自分なりに考えた方法を試す。
⑨言葉による伝え合い：思ったことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を聞いたりする。
⑩豊かな感性と表現：割ピンの特徴を活かした表現方法などに気付く。

⑶　考察

○幼児は、作りたい動物（型紙）を選び、ハサミで切ったり、一穴パンチで穴を開けたりして、いろんな動物を作り上げたい気持ちが強かったようだ。しかし、内容の２つめにあるような出来上がった動物に色を塗ったり、他の部位を加えたりするなど、自分なりに考えて工夫や試行錯誤をする様子は少なかった。また、作った動物を動かしながら、自分が思ったことや考えたことを友達と言葉でやりとりしたりする楽しさを味わうことには至らなかった。それは、自由に作ることができる様々な大きさの色画用紙もあったが、子ども達一人一人が困らないようにと教師が動物の型紙や穴を開ける場所を描いておくなど準備したため、子どもの創意工夫が引き出されにくくなり、型通りの作品が多くなったと考えられる。

○「動物作りを楽しみましょう」といった導入だったが、動物の森がイメージできるような環境を用意し、“動物の森づくりをしよう”というようなめあてを設定すると、割ピンによって動物の体の動きを多様にできることを面白がったり、これまでの表現とは違った表現ができた達成感を味わったりしたのではないか。

○今後は、10の姿として、以下に示すようなものを求めていきたい。

ねらい（○）・内容（■）

○気の合う友達と思いや考えを出し合いながら、必要な物を作り遊ぶ楽しさを味わう。

■友達とアイデアを出し合いながら、動物園ごっこに必要な物や道具を準備して遊ぶ。

■それぞれの動物に合った飼育小屋を工夫したり、動物や飼育員になりきってやりとりを楽しんだりする。

教師の願い	幼児の姿	学　び
・イメージに合わせて動物を動かして、皆で遊ぶ楽しさを味わわせたい。 オリジナル作品	・作った動物の足や首を動かしてみる。 ・自分が作りたい動物をオリジナルで作っている。 ・作った動物を、壁面にある森の中で動かしてみる。 ・自分の動物を友達に見せたり、友達の様子を見たりしている。	・割ピンの視点を中心に動きを試したり、面白さを感じたりしている②⑥。 ・自分がイメージしたものを割ピンの特性を生かして表現する喜びを味わう②⑩。 ・割ピンで動物の首や足を動かすことで、イメージが変わることに気付いたり楽しんだりする②④⑨⑩。 ・自分達が作った動物が集まってできる壁面の「動物の森」を楽しみにし、できた作品について友達とやりとりをしながら、達成感を味わう③④⑧⑨。

関連する10の姿

②自立心：考えたり工夫したりして諦めずにやり遂げることで、達成感を味わう。

③協同性：互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて考えたり、協力したりし、充実感をもつ。

④道徳性・規範意識の芽生え：友達と様々な体験を重ねる中で、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりする。

⑥思考力の芽生え：友達の様々な考えに触れる中で、新しい考えを生み出す喜びを味わい、自分の考えをよりよいものにする。

⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚：数量や図形などに親しむ体験を重ねたり、文字の役割に気付いたりする。

⑨言葉による伝え合い：経験したことや考えたことなどを言葉で伝え合うことを楽しむ。

⑩豊かな感性と表現：素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わう。

○新しい遊びを提示する際には、その遊びや教材の特性、５歳児の楽しみどころ、チャレンジしたくなるところ、試行錯誤しながら目標に向かうところなどを具体的にイメージしながら、保育展開を考えることが大切である。今回のように動かしながら、自分が思ったことや考えたことを、友達と言葉でやりとりしたりする楽しさを味わってほしいと願う場合は、以下のような環境構成が考えられる。

・右写真（４月の集団活動：切り紙）のように、割ピンを使った動物の裏面にストローをつけられるようにする。

・ストアーハウスを身近に置いておくことで友達とのやりとりが自然と生まれるようにする。

・壁面に水辺や草むらなどと共にストローを挿すことができるよう細工しておくことで、こうしてみたらどうなるだろうなどと友達とやりとりを楽しんだり、言葉のやり取りができたりするようにする。

・割ピンを使った動物の裏に画びょうをつけ、自立できるようにし、作った動物の動きを楽しむことで、自分の気付きや考えを友達に知らせることができるようにする。

５．まとめ

○割ピンを使った１回目の集団活動のワニ作り後、好きな遊びの時間にも経験できるように環境を整えたことで、割ピンや一穴パンチの仕組みを知り、自分の作りたい動物をいくつも作っていた。また、一穴パンチ後の丸い紙から発想を広げ、オリジナルのおもちゃ作りをしたり、それがよりよい物になるよう追求するため、自分の考えを友達と言葉でやりとりしたり、試行錯誤したりし、友達同士刺激し合う姿が見られた。集団活動で仕掛けのある製作の面白さに気付き、好きな遊びの時間で仕掛けやその時に使った素材や用具を生かして自分なりに工夫して遊んだ姿は、集団遊びの時間内だけでは得られにくい工夫や試行錯誤を、好きな遊びの時間に経験していることになる。

○一穴パンチや割ピンといった新しい素材を取り入れたことによって、スノードームのようなおもちゃを考えたり、動かしたい場所を考えて割ピンを使い、好きな遊びで活かしたりするなど、子どもは大人の発想をはるかに超える存在である。好きな遊びと集団活動は、互いに関連し合って遊びの質が高まり、子どもの学びを深めるといった、補完する関係にあることがわかる。好きな遊びだけでは子ども達一人一人の経験値が異なり、学びの基礎となる知識、技能が身につかないことも考えられる。逆に時間に制約のある集団活動だけでは、子どもがまわりの環境に自ら関わる中で、時間をかけて考えたり、工夫したり、試行錯誤したり、表現したりするなど、思考力、判断力、表現力の力は培われにくい。運動、表現（絵、製作、ダンスなど）などを計画的に取り入れ、好きな遊びと集団活動が往還し、互いの活動が豊かになるような保育を目指したい。

高岡支部

研究主題　「５領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」

１．研究にあたって

昨年度は各園で研究保育を実施し、それを基に深めてきた研究内容について、それぞれの園でまとめた。いろいろな意見を出し合いながら進めていくことで、子どもの育ちや各年齢の遊び、活動の意味などを改めて考え直すことができた。また、子どもの姿から内面（楽しんでいること、経験していること）を読み取ろうとしたり、その姿が５領域や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下10の姿という）のどこにつながっていくかということを考えたりする意識が広がってきていると感じた。しかし、10の姿へのつながりを考えることが終着点になっているようにも感じている。10の姿が本当にそれで合っているかということを、日頃の姿やそれまで経験してきたことなどの背景も含めながら、子どもの姿に立ち返って協議を深めていくことが大切になってくるという課題を確認した。

このことを踏まえて今年度は、その日のねらいに合った一つの場面を選び、日々の子どもの姿が５領域のどの内容につながり、どのような経験をしているのか、何が育ちつつあるのかという視点で10の姿について考え、日々の保育に必要な環境構成や援助を探り研究を進めていきたい。

２．研究の進め方

今年度は『にじいろ園』の保育を基に、研究推進委員が中心となって研究を進め、講師の助言を受けながら主題に迫っていく。

① クラス担任の思いを聞き、日頃の課題とする姿や場面なども考慮しながら、一つの場面にしぼり、多面的に見ていく。

② 研究をより深めるために、幼児の目線で写真・ビデオを撮り、時系列で振り返るなかで、個々の様子を確認し、人や物との関わり、表情や目線などから内面を推し量っていく。

③ 遊びの場面から、どのような経験をしているのか、気付いたり試したりしながら何が育ちつつあるのかということを５領域で捉え、10の姿のどの部分につながっていくのか協議を深めていく。

④ 子どもの力となっていくために遊びの中での学びを保育者が読み取り、今後育ってほしい５領域の内容や10の姿につながる環境構成や援助を考えて活かせるようにする。

協議の視点

- 誰が、どこで、どんなことに興味や関心をもって関わり、どのように遊んでいたか（本日のねらいに合った姿を捉える）。
- その遊びを通して、どのようなところに楽しさを感じているか。
- どんな経験をしているのか、どんなところが育ちつつあるのか（５領域で捉え、10の姿を探っていく）。
- 明日の保育につなげるために、どのような環境構成と援助がプラスされるとよいか。

3．研究経過

実施日	会　　場	会名および内容
4月5日	ゆすはら雲の上の図書館	高岡支部総会　令和2年度活動報告　会計報告 3年度役員改選　研究計画等
5月22日	高知大学教育学部附属幼稚園	第1回研究推進委員会（研究の進め方について）（ZOOM）
7月2日	津野町総合保健福祉センター「里楽」	第1回研究員会（第1回研究保育の打合せ）
7月13日	津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園	第1回支部研究保育　研究協議（4歳児） 講師　高知大学教育学部附属幼稚園 副園長　中山　美香　先生
10月14日	津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園	第2回支部研究保育　研究協議（3歳児） 講師　高知大学教育学部附属幼稚園 副園長　中山　美香　先生
10月21日	津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園	第3回支部研究保育　研究協議（5歳児） 講師　高知大学教育学部附属幼稚園 副園長　中山　美香　先生
11月1日	津野町総合保健福祉センター「里楽」	第2回研究員会（研究保育の事例検討・研究会の資料検討）
11月19日	津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園	高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会（ZOOM） 講師　高知大学教育学部附属幼稚園 副園長　中山　美香　先生
12月14日	津野町総合保健福祉センター「里楽」	第3回研究員会（教育研究会のまとめ・研究保育のまとめ）
12月24日	高知大学教育学部附属幼稚園	第2回研究推進委員会 （「幼児教育のあゆみ」のまとめ方について検討）（ZOOM）
1月12日	津野町総合保健福祉センター「里楽」	第4回研究員会 （推進委員会の報告・高岡支部資料について協議）
3月9日	高知大学教育学部附属幼稚園	第3回研究推進委員会 （「幼児教育のあゆみ」のまとめ方について検討

4．研究内容

第1回研究保育　7月13日（火）

津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園　4歳児きりん組　24名

子どもの育ちと保育者の願い　（病院ごっこ抽出）

・気の合う友達を誘い、役になりきってごっこ遊びをしたり、自分の思いを出しながら友達とやりとりをしたりして楽しんでいる姿が見られているが、言葉が不十分なことやイライラした気持ちを抑えられずに手が出たり、自分の思いを押し通そうと強い口調で相手に思いを伝えたりしてトラブルにつながる姿も多い。友達のよさや一緒に遊ぶ楽しさを感じたり、一緒にいるからこそ感じられるうれしさも少しずつ感じていったりしてほしい。

本日のねらい（○）　内容（△）　（一部抜粋）

○先生や友達に思いを伝えたりやりとりをしたりしながら、関わって遊ぶことを楽しむ。

△医者や患者、お店屋さんなどになりきって、友達と一緒に遊ぶ。

△友達と一緒に的を好きな位置や高さに置き替えながら、的当てをする。

△積み木や筒を組み合わせて道を作り、ペットボトルの蓋などを転がしたりして自分なりにイメージした道や転がり方を楽しむ。

協議内容　病院ごっこ

【子どもの姿①】

・A児はベッドに寝て動かない。人形をおなかの上に乗せ、出産のイメージでお母さんになっている。
・B児は看護師になり、体をさすったり、トントンしたり、ジュースを持っていったりして世話をする。布団が必要と思い、その場にあった敷物を布団に見立てて、A児にかける。

【子どもが楽しんでいること】

・それぞれが自分のやりたい役になりきる。
・自分なりのイメージで遊ぶ。
・自分が見たり、聞いたり、経験したりしたことを再現する。

【関連する5領域（　）内容】

表現　(8)
自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

【10の姿につながる育ち】

豊かな感性と表現
共通の目的に向けて、友達と一緒にそれまでの経験を生かしながら考えを出し合い、工夫して表現することを一層楽しむようになる。

【子どもの姿②】

・病気の人になってベッドの上に寝ているA児を、B児がそばで世話をしたり、声をかけたりする。

【子どもが楽しんでいること】

・同じ思いで友達と一緒に遊ぶ。
・その場で思いが合った友達と遊ぶ。
・なりたい役が違うことで病院ごっこが実現できる。

【関連する5領域（　）内容】

人間関係　(1)
保育者や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。

人間関係　(8)
友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見いだし、工夫したり、協力したりなどする。

【10の姿につながる育ち】

協同性
友達と関わる中で、様々な出来事を通して、嬉しい、悔しい、悲しい、楽しいなどの多様な感情体験を味わい、友達との関わりを深めていく。その中で互いの思いや考えなどを共有し、次第に共通の目的をもつようになる。

【明日からの保育につなげるためにどのような環境構成と援助がプラスされるとよいか】

・子どもが、病院ごっこがより面白くなるために必要な物を考えたり、考えたものを自分達で準備したり、ない物は保育者に相談しながら作ったりするよう、子どもの遊ぶ様子を見ながらイメージを引き出すような問いかけ（どのような物が必要か、どのような物を作ったらいいのか）をし、子どもと一緒に考えていく。

・子どもが自分の捉える世界を広げ、そのことでイメージをさらに豊かに膨らませていけるように、いろいろな道具を用意し、病院のベッドなど「こんなものもあるよ」と子どものイメージに合った物を選べるようにする。
・さらに遊びが充実していくように、個々に楽しんでいることを読み取ったり、子どもがどのようなイメージをもって遊んでいるかを探ったりする。
・子どもが自分でできないときに自分の言葉で相手に分かるように伝えることや、友達の思いを知り“私と一緒”ということを感じられるなど、子ども同士での助け合いの場が生まれるように、子どもの声を受けて保育者が全部やってしまわないようにする。

【協議からの学び】

この日の室内遊びの中から、事前に病院ごっこの一つの場面に絞ったことで、見方や捉え方は様々であっても協議の中でビデオを見て振り返りや、事実を共有することができ、意見が多く出された。病院ごっこを通して、５領域の内容と照らし合わせ、そこからどの10の姿につながっているか、どのようなところが育ちつつあるのか、参加者全員で要領を見て、考察を深めたことによって分かった。明日につながる環境構成と援助の仕方が分かり、子どもがどのようなイメージをもって遊んでいるか探ったり、そのためにはどんな物を使ったらよいかを考えたり、子どもの考えを引き出す問いかけをしたりするなど、その後の保育の実践に役立たせることができた。

第２回研究保育　10月14日（木）

津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園　３歳児ぱんだ組　21名

子どもの育ちと保育者の願い　（赤土遊び抽出）

・水を入れて赤土の感触の変化を目や体で感じることなど、だんごを作るまでの過程が楽しくなってきた子ども達の姿がある。
・友達数名といろいろな場所でごっこ遊びをする姿が多くなってきている。友達と関わって遊ぶ中で「○○ちゃんが～してくれん」「○○くんが～って言うた」などと保育者に伝えてくる子どもがたくさんいる。保育者がそれぞれの思いやイメージの違いを受け止めながら代弁するなどして、友達とかかわって遊ぶ楽しさを感じられるようにしたい。

本日のねらい（○）　内容（△）　（一部抜粋）

○気の合う友達との関わりを楽しんだり、自分の好きな遊びを楽しんだりする。
△友達や先生と同じ場で遊ぶ中で、簡単な言葉のやりとりをしながら遊ぶ。
△友達のしていることに関心をもち、一緒に遊ぶ。
△友達や先生と一緒に園庭にある葉や花の実などを使って遊んだり、泥や砂の感触を味わったりする。

協議内容① 赤土遊び

【子どもの姿①】

・土山の穴から土を手でかきだして、泥団子にくっつけていたC児が、D児に「こうやって、こうやって、こうやるがで」とやって見せる。
・D児は、C児のように手を動かし、土をとって自分の団子にくっつけていくと少しずつ大きくなっていった。

【子どもが楽しんでいること】

・友達と同じように作りたい。
・自分が経験していることを友達に伝えたい。
・友達に教えてもらったように、試してやってみる。
・試してやってみたら、大きくなってきた。

【関連する5領域（　）内容】

健康 (4)
様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
人間関係 (2)
自分で考え、自分で行動する。
言葉 (1)
友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。

【10の姿につながる育ち】

健康な心と体
安定感をもって環境に関わり、自己を十分に発揮して遊びや生活を楽しむ。
豊かな感性と表現
心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したりする。

【子どもの姿②】

・D児は、バケツの中に手を入れ、中に入っている泥をすくい上げて自分の団子にくっつけ、大きな泥のかたまりを作っている。

【子どもが楽しんでいること】

・どんどん泥をくっつけて、大きくしたい。
・“（泥と泥が）くっついた”という感覚や不思議さが楽しい。
・どろどろ、べちゃべちゃといった泥の感触を楽しんでいる。

【関連する5領域（　）内容】

環境 (1)
自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気づく。
環境 (2)
生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。

【10の姿につながる育ち】

自然との関わり・生命尊重
園内外の身近な自然の美しさや不思議さに触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、関心をもつようになる。
思考力の芽生え
不思議さや面白さを感じ、こうしてみたいという願いをもつことにより、新しい考えが生み出され、遊びが広がっていく。

【明日からの保育につなげるために、どのような環境構成と援助がプラスされるとよいか】

・バケツに水と赤土を入れて混ぜたり、泥団子を作ったりして遊んでいたテーブルに、前日に作った物をカゴに入れて置いていたため、テーブルの上がいっぱいになっていた。子ども達が、広い場で思うように遊べるよう、出来上がった物を置いておくテーブルと赤土を使って作りたい物を作るテーブルを用意しておく。
・赤土を使って自分が作りたい物を作るときに、赤土をふるいにかけている子どもの姿があった。さらに遊びが

広がっていくよう、３歳児にとってふるいをどんな思いで使っているのか（年長児みたいにしてみたい、これを使ったらどのようになるか等）子どもの姿を振り返り、明日からの遊びに必要と思われる道具を考え援助する。

・作った泥団子や遊びに使った草花を自分で出したり、片付けたりする場所が設定されていなかった。コーナーや棚のある必要性や便利さに気付いたり、自分が作った物を置いておけたりして自分が使いたいときに取り出して遊んだりする姿につながるよう、団子や遊びに使った草花を片付けられるコーナーや棚を最初は子どもと相談しながら用意する。

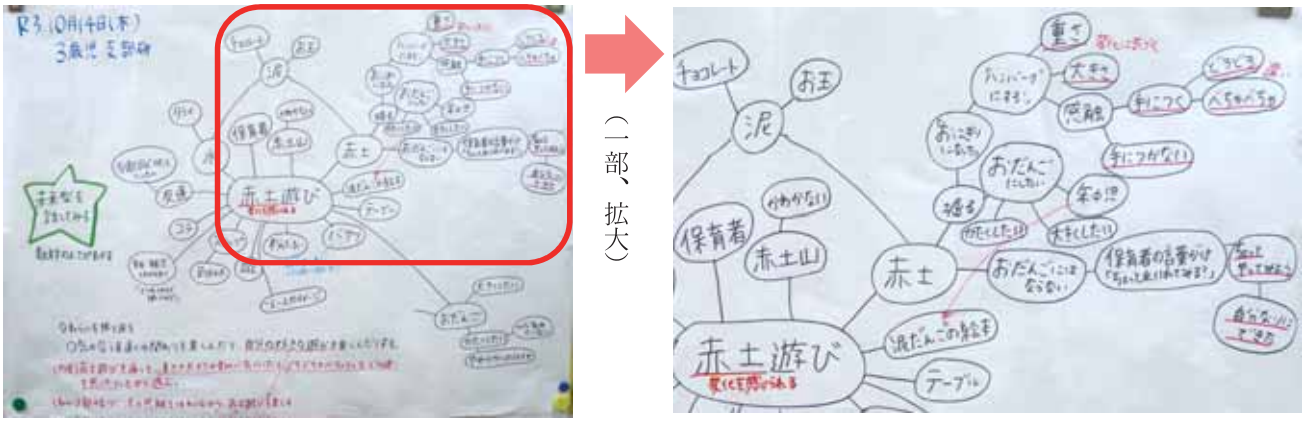
・泥団子を入れる物としてプリンなどの空き容器が多く用意されていたが、作った泥団子のサイズによっては入れにくかったり、入りきらなかったりすることも考えられるため、いろいろな大きさの入れ物を用意しておき、自分で選んで使うことができるようにする。

協議内容②　赤土遊びを取り上げ、教材研究を行い、ねらい・内容を考える。

～文殊の知恵（文殊MAP）～

一つの遊びについて、見たこと、感じていること知っていることなどを書き出していく手法である。具体的に遊びを見ることが促されるとともに、保育者一人一人の保育観を確認することにもなる。多くの目で遊びを分析することで、多角的に遊びを捉えることができ、子ども理解を深めることができる。

進め方：①対象とする遊びを決め、その遊びの名前を模造紙の中央に書く。
②遊びから気付いたことを、模造紙にどんどん書き出していく。
③書き出していく過程で出てきた気付きなども書き加えていく。
④出た意見から、ねらい・内容について振り返る。



この日のねらいが大きいことや、日案のねらい・内容を立てることの難しさを感じている担任の悩みから、教材研究として赤土遊びを取り上げ、協議を行った。赤土遊びの中で何を楽しんだり感じたりしているのか、何が経験されているのか、話し合いを深めたことで、以下のような今の子どもの姿に合ったねらい・内容を再検討することへとつながった。

ねらい　自分なりに赤土遊びを楽しみながら、泥の感触を味わう。

内　容　赤土遊びを通して、重さや大きさの変化に気づいたり、どろどろやべちゃべちゃなどの違いを感じたりしながら遊ぶ。

【協議からの学び】

赤土遊びの中で経験している泥団子について掘り下げ意見を出し合ったことで、子どもが重さや大きさの変化に気付いたり、手につかない・手につく・どろどろ・べちゃべちゃといった感触を味わったりしているということに気付いた。また、それぞれの子どもの思いの深さや同じ環境を通しても個々にもつ遊びのイメージが違うことが分かった。今、経験していることと子どもの姿が可視化され、それを具体的に、ねらい・内容に落とし込むとその遊びに沿ったねらいが立てられるということも分かった。

担任や保育経験の少ない参加者にとって、この手法（文殊マップ）を取り入れて協議をすすめることで意見が出しやすい雰囲気ができ、複数で保育をしている保育者にとっては、自分にも相手にも分かりやすく、クラスや園全体での共有ができることを知った。参加者も新しい手法を知る機会となった。

第３回研究保育　10月21日（木）

津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園　５歳児ぞう組　18名

子どもの姿と保育者の願い

・散歩で拾ってきたどんぐりや枝を使って、どんぐりを転がす迷路を作ったり、どんぐりコマを回したりすること、数珠玉を使ってネックレスやブレスレットを作ったりすることを楽しんでいる。友達と一緒にイメージを共有し、試行錯誤しながら表現する楽しさや、季節を感じながら身近な自然物を遊びや生活に取り入れる楽しさを感じてほしいと思っている。

・以前は何でも保育者を頼っていた姿から、今は自分達でハンター役、ろうややタイム場の場所を決めたり、作戦を立てたりなど、少しずつ友達と一緒に遊びや生活を進められるようになってきている。しかし、まだ自分の思いが強く、相手の気持ちを受け入れることができずにいざこざになることも多い。友達と一緒に遊びや生活を進める楽しさを感じるとともに、互いのよさに気付き、認め合ったり助け合ったりできるようになってほしい。

本日のねらい（○）　内容（△）

○自分でイメージした物を作ったり、友達とイメージを共有しながら試したり工夫したりして作ることを楽しむ。

△必要な材料を選んで組み合わせて自分なりにイメージしたものを作る。

△友達とどんぐりの転がり方を試しながら工夫して作る。

○ハンターごっこをする中で、相手の動きを見ながら自分なりに考えたり、友達と考えを伝え合ったりして一緒に遊ぶことを楽しむ。

△相手の動きを見ながら捕まらないように逃げたり、捕まえられるように追いかけたりする。

△友達と考えを出し合って役割分担したり、仲間を助けるために作戦を立てたりする。

協議内容① どんぐり転がしの場面より

朝、子ども達から「大きい箱がほしい、もっと大きいのがいい」と1.5メートル四方の箱を使ってどんぐりころがしが始まる。５～６人が箱の周りに集まり、どんぐりを転がしている。

【Ｅ児の姿】

・箱の上からどんぐりを一斉にたくさん転がす子どもがいる中、Ｅ児はどんぐり１個を転がし、転がる様子を見ていた。
・トイレットペーパーの芯をつけたり、お菓子の箱をゴールにしたりしてコースを自分なりに作っていた。
・どんぐりがゴールに入るように道を作り直していた。

【子どもの姿から見える学びや経験】

・“どんぐりをゴールに入れたい”という目的が明確。どんぐりが転がる様子など予測、想像、イメージしている。
・実際に転がす中で、芯の角度やゴールの位置を調節して試している。

【関連する５領域（　）内容】

健康 (4)
様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。

環境 (8)
身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連づけたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。

【育ちつつある10の姿】

思考力の芽生え
遊びや生活の中で、物の性質や仕組みなどを生かして、考えたり予想したり、工夫したりするなど、身近な環境との多様な関わりを楽しむ。

【明日からの保育につなげるために、どのような環境構成と援助がプラスされるとよいか】

・大きな箱を５～６人で使っていたが、それぞれのやりたいことや思いが違っていたため「ゴールに入れたい」という子どもの思いが達成できずにいた。２～３人で意見を言い合いながら遊ぶことができるように箱の大きさを見直す。
・まだ、それぞれの思いで遊びを進めていこうとする姿が多く見られているので、保育者は子どもの思い（気づき、考え）やイメージ（どのように遊びたいのか、どのように完成させたいのか）を子どもと一緒に語り合う時間をつくり、引き出していく。それぞれがやりたいことをすり合わせ、状況を整理して子どもの思いをつないでいく援助をする。
・「どんぐりをゴールに入れたい」「入れるためにはこうしたい」という思いに合わせた材料を自分で選ぶことができるようにし、自分や友達と一緒に考えたことを試したり工夫したりして、達成しようとする姿を支えていく。

協議内容② ハンターごっこの場面より

ハンターごっこ：ハンターに捕まった人は、ろうやに入る。

タイム場は、逃げるチームが出たり入ったりして休憩できる場所である。

【子どもの姿①】

ハンターチーム

- ハンターに捕まった友達がろうやスペースに来ると、ハンター役の子どもが見張りに来る。先に友達が来たことに気付くと、友達に任せ自分は捕まえに行く。
- 捕まっている友達と話しつつも、助けにくることを防ぐように全体を見ながら見張っている。
- 捕まえに行きたくなったときは、同じハンター仲間の友達に「見張りお願い」と声をかけ、頼まれた子どももすぐに応じ交替している。

逃げるチーム

- 「作戦会議しよう」と友達に声をかけ、自分が考えた方法を伝え、同じタイミングで走ってタイム場から出て行く。

【子どもの姿から見える学びや経験】

- 見張り役の必要性が分かっている。そのため、自分が見張りから離れるときは、“誰かにいてもらわないと”という思いがあり“交代する”ことへとつながってきている。
- お互いに気持ちよく交替できる言葉の伝え方。
- 互いの状況を把握したり、仲間意識が芽生えてきたりしている。

- “一人では怖いけど、友達と一緒ならいけそう”という安心感や勇気。
- 同じタイミングで出ることでハンターの目を分散できるという予想。
- ハンターに捕まりそうで怖いけど、仲間を助けたい気持ち。
- 作戦をたてることが楽しい。

【関連する５領域（　）内容】

人間関係 (8)

友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見いだし、工夫したり、協力したりなどする。

芽生えつつある

【育ちつつある10の姿】

協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、充実感をもってやり遂げようとする。

思考力の芽生え

周囲の環境に好奇心をもって積極的に関わりながら、新たな発見をしたり、もっと面白くなる方法を考えたりする。

【子どもの姿②】

- ハンターの動きを見ながら、タイム場から出たり入ったりしている。
- 相手の動きが見えやすい位置や、相手が出てきやすそうな距離をとって、友達がタイム場から出てくるのを待ちぶせしている。
- ろうや前で見張りをしつつも、友達を捕まえようと追いかけたりもする。

【子どもの姿から見える学びや経験】

- “相手と自分”“タイム場（またはろうや）と自分”の距離感を感じ取っている。
- 逃げれそう、戻ってこれそうという距離を感じながら、思いっきり走る。

↓

相手とのかけひきも楽しんでいる（遊びの楽しさが子ども達の中に浸透し始めている）。

【関連する５領域（　）内容】

環境 (8)

身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。

【育ちつつある10の姿】

思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。

【明日からの保育につなげるためにどのような環境構成と援助がプラスされるとよいか】

・少しずつ自分達で遊びを進められるようになってはきているが、まだ保育者がいることで安心して遊べる様子が見られ、保育者の存在がキーマンとなっている。

⇩ 芽生えつつある人間関係 (8) や協同性がもっと育っていくために…

・友達と一緒に遊ぶ中で自分の力を発揮し、互いの良さを認め合う関係をつくっていくために、子どもが工夫したり自分なりに考えたりしてやっていることや、友達同士で考えて試してみていることなどを、保育者がその場で認めて価値づけていく。具体的には一日の振り返りの中ではなく、その場その場で伝えたり、ゲームの合間などにみんながいる場で伝えていくことで、さらに考えたことをやってみたり友達がしていることを取り入れたりする姿にもつながり、より遊びの楽しさを味わえるようになる。友達とのやりとりやつながりなども言葉に出して伝えていくことで、友達の存在やよさを感じながら遊ぶようになり、友達関係も深まっていくのではないだろうか。

・場の広さや位置、タイム場やろうやの位置などは子ども達と一緒に考えて決めてきたが、ろうやはハンターにとっては守りやすく、逃げるチームにとっては捕まった友達を助けにくいつくりになっていた。それにより「次はハンターの数を減らしたい」と子ども達なりに遊びを楽しくしたい思いが出ていたと思う。ハンターの数だけでなく、場の広さやタイム場とろうやの位置や広さ、つくり方なども遊びの様子を見て提案したり、やってみてどうだったかを子ども達に聞いたりして、遊びが楽しくなるよう必要に応じて変えていってみる。いろいろな方法を試してみることで、今以上に考えを出し合ったり遊びの工夫にもつながったりするのではないだろうか。

・今は保育者がいるので安心して思いや考えを出している。周りに働きかけ仲立ちしてくれる保育者がいるので、遊びが進んでいっていると思われる。子ども達だけで互いの思いや考えを聞き合いながらどれぐらい遊びを進めていくことができるか、一歩引いて見守ったり、あえて遊びに入らない（遅れていく、少しの間遊びから抜けるなど）時間をとってみたりしてはどうだろうか。

【協議からの学び】

3歳児・4歳児の協議では、その日の遊びの中から一つの遊びに絞ったり、クラスの課題とするところや担任の悩んだりしていることから考えて研究協議を行ったが、5歳児においては就学に向けた後半の時期と捉え、主題の10の姿のどのような部分に近づいていくのかというところを重点的に考えた。子どもが“おもしろそう”“楽しそう”と思う瞬間が、子どもの学びが深まりやすくなる瞬間であるということから、子どもの実際の姿を次々と出し合った。そこから、幼保連携型認定こども園教育・保育要領等を基に5領域と10の姿のどの内容に当てはまるのか、本当にそうなのかとじっくり考えた結果、それぞれの遊びが5領域も10の姿も芽生えつつあるところと捉えることができた。

また、10の姿の育ちを願うとき、例えば“協同性”では、この日のどんぐり転がしの場面では“それぞれが作っていた”という子どもの姿があったが、“相談しながら1つのものを作っていた”となるよう見通しをもった保育を実践できるように一日の遊びの流れを考えることが求められる。また、保育者は子どもの育ってほしい姿を願い、ねらい・内容を達成するための環境構成と援助（友達に考えを伝える姿を支える援助は？友達とイメージを共有する姿を支える援助は？など）を具体的に掘り下げて考えていくことが大事であるということを学んだ。

高知県国公立幼稚園・こども園教育研究会記録

令和３年11月19日（金）　津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園（zoomにて開催）

研究協議の視点
・幼児の学びは何か　　・プラスしたい環境構成と援助

【３歳児グループ協議より】※各グループ協議で出た意見の記録より抜粋

○何を楽しんでいるか　→どんな学びへとつながっているか

○友達に自分の持っている泥団子を触らせても気にしていない。友達の名前を何度も呼んでいる。
→友達と一緒に作っている気持ちになっている（先生から友達への関わりの広がり）。

○自分で丸めた泥団子を近くにいる友達や保育者に見せていた。
→自分でできたことを受けとめてもらう喜び。喜びから“できる”という自信へとつながっていったのではないか（意欲の育ち・学びに向かう力）。

○これまで土に親しんでこなかったＤ児が、泥と土の感触を楽しんでいた。
土の硬さやべちゃべちゃ感、泥に触れる感触を楽しんでいた。
→土や水の感触、物の性質（水に入れると泥団子が壊れるなど）に気付く。

子どもの姿につながった環境構成と援助、プラスしたい環境構成と援助

・最初の方は保育者も一緒に作っていたが、子どもがじっくり楽しみ始めた姿から、子ども達だけでの空間にしたり、見守ったりする。
・保育者が複数いるので、援助の仕方の共有や共通意識をもって、子どもと関わっていく。

【５歳児グループ協議より】※各グループ協議で出た意見の記録より抜粋

○何を楽しんでいるか　→どんな学びへとつながっているか

○自分達でルールを考え、意見を出し合って友達を捕まえる、逃げるの駆け引きを楽しみ、作戦を考えて、保育者や友達と一緒に遊ぶことを楽しんでいたり、大人数でルールを守って遊んだりすることを経験していた。（仲間意識ができてきている）
→友達と共通の目的をもって、助けに行くという目的をもって行動していた。
思考力の芽生え　道徳性・規範意識の芽生え

プラスしたい環境構成と援助

・ルールを変化していったり、友達が増えたりするなど、子ども達が考えて自分達の遊びとして遊びを進めていけるように援助していく。
・遊びの後で“どのようにしたら、もっとおもしろくなるのか”“困ったことはない？”など話し合う場面をつくり、次の日は、こんなことをしてみようという期待につながるようにしていく。

【講師の助言より】

○３歳児・・・泥団子づくり　～幼児の学びを読み取る～

幼児の姿の捉え方

・一瞬の姿のみで判断しない。
・様々な情報（幼児の姿）から考える。
　→前後の活動の姿、昨日までの姿からも考える。

楽しんでいるだけでとどまらない。何を学んでいるかを探ることが大事である。

その活動が幼児にとってどのような意味があるのか。
その活動を通して、幼児にどのような学びがあったのか。

領域「健康」の内容

このようにして得た安定感は、心の健康を育てる上で重要であり、幼児が自立の方向に向かっていく上でも欠くことができないものである。

(1)先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。

(3)進んで戸外で遊ぶ。

近年、地域や家庭において戸外で遊ぶ経験が不足していることから、戸外での遊びの面白さに気付かないまま、室内遊びに偏りがちの幼児も少なくない。

(4)様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。

心と体の発達を調和的に促すためには、特定の活動に偏ることなく、様々な活動に親しみ、それらを楽しむことで心や体を十分に動かすことが必要である。

(6)健康な生活のリズムを身に付ける。

幼児のもつ生活のリズムに沿いながら、活動と休息、緊張感と解放感、動と静などの調和を図ることが大切である。その際、幼児の活動意欲が十分に満たされるようにすることも大切である。

幼児の学び（資質・能力「知識・技能の基礎」）

・指先に力を入れると土がつかめる（取れる）。
・手のひらの汚れは、水に浸けるときれいになる。
・泥団子を水に入れると壊れる。
・水に土を入れていくと、どろっとなる。
・どろっとした泥では、簡単に大きな団子は作れない。

○５歳児・・・ハンターごっこ　～幼児の発達を促すような保育～

子どもが楽しい、面白いと感じる瞬間

↓

子どもの学びが深まりやすくなる瞬間

- 相手を交わしたりしやすい環境がある
- 作戦を立てたくなる環境がある
- 感じたことを出し合ってルールを作る

子どもが繰り返し取り組み、学びが深まる状況に

- 平面の広いだけの環境では、走るのが速いが勝ちやすい。
- 足の速さだけでの勝負は、駆け引きが生まれにくい。
- 障害物があると、フェイントをかけたり、挟み撃ちをしたりが生まれやすい。
- 「離れて」「早く出て」と言っているだけで、ルールの工夫にはつながっていない。
- 友達の訴えには耳を傾けないが、先生が何か言うと望ましい方向での動きがすぐに見られる。
- 「いいこと考えた」と新しいアイディアを出す姿を支える。（子どもに聞く、教師がモデルとなって提案する、失敗から学ぶことを大切にする）

一日の中でクラスの活動を取り入れていくようにする。
製作や行事だけではなく、様々な活動から考えてできる。
ただし、小学校の授業のようにはならないようにする。

5．まとめと今後の課題

○本年度は、３～５歳児の研究保育を通して、講師の先生からの助言を基に、その日のねらいに合った場面から子どもの経験や育ちに視点をあてて研究を進めた。ＫＪ法を協議の基本とし、子どもの遊ぶ姿から場面を選んで、動画を繰り返し見て子どもの姿を共有しながら協議を深める方法、参加職員の経験年数や日頃の担任の悩みなどに合わせた手法で協議を深めるなど新しい方法も取り入れていった。状況に合わせてやり方を変えたことで、協議の中で意見が出しやすく、深まったのではないかと感じた。今後も参加職員が子どもの姿の捉え方や、環境構成や保育者の援助の在り方を学び合えるように、その日の研究保育によって協議の手法を検討していきたい。

○協議内容としては、昨年度の課題を念頭に置き、研究保育当日の子どもの姿から経験していることや育とうとしている力などを読み取っていくとともに、その日の姿だけでなく日頃の姿やそれまでの経験などの背景も含めて５領域や10の姿へのつながりを考えていくようにした。そうすることによって、子どもの姿に立ち返りながら、それぞれの見方や捉え方を出し合い“本当にそうなのか”ということをじっくり吟味することができ、今後育ってほしい子どもの姿や環境構成、保育者の援助の在り方についても考えていくことができたと思われる。

○保育者の意図が目の前の子どもの主体性とバランスよく絡み合っていたかを振り返り、保育者の一方的な働きかけでなく、子どもに活動を任せるだけのものでもなく、子どもにどのような育ちを期待するのか、そのために必要な経験は何かを考え、発達に必要な経験が得られるように見通しをもち、適切な環境構成や援助を継続していくことを大切にしたい。５歳児だけでなく、３歳児、４歳児の時期から幼児が発達していく方向性を意識し、それぞれの時期にふさわしい遊びの中で10の姿につながっていることを意識して保育を進めていきたい。

○コロナ禍の影響を大きく受け、研究保育に他園の研究員が参加できなかったり延期となったりした。研究員が集まって話し合いを深める機会が十分にとれず、内容を共有することや、研究をより深めていくことの難しさを感じた。できるだけ研究保育当日の協議の中で話し合いが深まるように試みたが、十分ではなかったと思われる。来年度もコロナ禍で研究することを想定し、できるだけ多くの目で子どもの姿を読み取っていけるように動画を有効活用し、各園で協議したものを共有して、様々な意見を基に協議が深まっていくように、研究方法や進め方についても考えていきたい。

編集後記

本年度も諸先生方のご協力をいただきまして「幼稚園教育のあゆみ　その47」を発行することができました。

今年度も研究テーマを「５領域を通して育まれる幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながる保育のあり方（幼児理解をもとにして探る）」としました。「幼児期までに育ってほしい姿」は、これまでも大切にしてきた健康・人間関係・環境・言葉・表現の５領域を通して育まれます。保育の基本は５領域であることをおさえながら、子どもの遊びや生活の中での具体的な姿から何が育とうとしているのかを捉え、実践事例を通して研究に取り組んできました。

11月には、津野町立幼保連携型認定こども園にじいろ園において、高知県国公立幼稚園・こども園会教育研究会が行われ、３歳児と５歳児の保育を公開していただきました。コロナ禍による感染症対策の面から初の試みであるZoom開催となり、公開保育においても動画を通して協議が行われました。対面型で行う研究会のよさを痛感しながらも、動画を通して同じ場面を共有する中で様々な意見を出し合えたことは、新しい方法への挑戦とともに豊かな学びにつなげることができたと思います。同じ遊びでも一人一人の子どもが何を楽しんでいるのか、子どもが楽しい・面白いと感じる瞬間はどこにあるのかなどを、具体的な事実を拾い集めながら読み取っていくことの重要性と、保育者の願いの持ち方や、子どもの学びが深まっていく環境構成と援助について様々な視点から考えていく大切さを学びました。

発行にあたり、皆様のご協力に感謝し、このあゆみが諸先生方や各支部において活用されることを期待し、一層のご指導を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

令和３年度　幼児教育のあゆみ　その47

高知県国公立幼稚園・こども園会

責任者　古　味　美　和

連絡先　〒781－5232
高知県香南市野市町西野630
香南市立野市幼稚園
ＴＥＬ　0887－56－1953
ＦＡＸ　0887－50－6659

発行日　令和４年３月31日